

## 目次

### はじめに

2020年の後をめざしたオリンピック・パラリンピック教育を .....	宮本 信也... 2
2020年を目指す上での課題 .....	真田 久... 2

### 活動報告

#### スポーツ庁委託事業

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について .....	荒牧 亜衣、大林 太郎... 3
第2回オリンピック研究教育センターコロキウム報告 .....	宮崎 明世... 5
第8回オリンピック教育フォーラム .....	大林 太郎... 6
日本オリンピックアカデミー 第4回ユースセッション in つくば クーベルタン—嘉納ユースフォーラム2016 実施報告— .....	中塚 義実... 7

### 実践報告

オリンピック・パラリンピック教育にかかわる教育活動 .....	清水 由... 11
附属中学校の取り組み .....	國川 聖子... 13
附属高等学校におけるオリンピック教育の実践 .....	奥村 準子... 15
2020年東京オリンピックに向けての取り組み .....	横尾 智治... 20
附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践 .....	藤原 亮治... 22
2016年リオデジャネイロパラリンピックに参加して感じた事。 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて思うこと。 生徒たちに伝えていきたいこと。 .....	寺西 真人... 24
附属聴覚特別支援学校における取り組み .....	渡邊 明志... 26
みんなで盛り上げよう！！『大塚オリバラデー2016』開催♪ .....	深津 達也... 31
附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み .....	宮内 綾香... 33
附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取り組み .....	河場 哲史... 36
大学におけるオリンピック教育 筑波大学における全学対象の総合科目としての教育実践について .....	荒牧 亜衣... 38

### 特別寄稿

1972年札幌大会に関連して実施されたオリンピック教育 .....	福田 佳太... 39
トーマス・バッハ IOC 会長 来日記念特別式典 .....	真田 久... 45
オリンピック・パラリンピック教育推進を目指したチャレンジ ～知的障害児にとってのオリンピック・パラリンピック教育とは～ .....	筑波大学附属大塚特別支援学校... 48

## はじめに

### 2020年の後をめざしたオリンピック・パラリンピック教育を

筑波大学副学長・理事、附属学校教育局教育長 宮本 信也

平成28年度も、附属学校群では、昨年度同様、オリンピック・パラリンピック教育に関するさまざまな活動が行われました。個々の詳細は、本冊子でご覧いただくとして、概要をご紹介します。授業や体育祭での取り上げの他、普通学校と特別支援学校の児童生徒によるスポーツ交流が活発に行われました。附属学校教育局では、今年度からの第三期中期目標・中期計画期間の重点課題の一つとしてインクルーシブ教育をあげていますので、そうしたことも関連したのかもしれませんが、今年度特有の事項としては、トーマス・バッハ国際オリンピック委員会会長来日記念特別式典への附属学校高校生の参加、東京2020公認マーク使用の承認などがあげられます。

ところで、平成21(2009)年春、当時の阿部生雄附属学校教育局教育長は、附属学校の先生方からのインタビューに応え、附属学校の今後の展望としてオリンピック教育の発信を述べられています(ポローニア15)。そして、平成22年度、附属学校教育局は、第二期中期目標・中期計画と関連した重点施策として、「附属学校の児童生徒を対象とする国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討する」を掲げました(ポローニア19)。筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育は、2020東京大会と直接には関連することなく、独自の取り組みとして始まったという歴史を持っています。2020年まであと3年となった現在は、東京大会を意識した活動が中心となるにしても、私たちは、2021年からも当然のようにオリンピック・パラリンピック教育を附属学校群で続けていることでしょう。

### 2020年を目指す上での課題

筑波大学体育系体育専門学群長、CORE事務局長 真田 久

2010年にオリンピック教育が附属学校群として本格的に始められてから7年が経過しました。2015年度は、スポーツ庁の事業を受託して、オリンピック・パラリンピック教育調査研究事業を行いました。宮城県、京都府、福岡県の3県でスタートが切られましたが、これらの3県を選んだのは、復興に関連した地域、日本文化を抱えている地域、そしてアジアに開かれた国際的な都市という理由でした。各県の特徴を生かしつつ、地元ゆかりのアスリートを発掘しながら、各教科の授業の中で、また学校行事や講演会として、様々に行われました。

2016年度には、スポーツ庁の「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」を受託し、より全国に普及することを図って早稲田大学、日本体育大学も加わって12府県に拡大しました。この事業は、本年度2017年度は、約20府県・政令指定都市にて実施される予定です。都道府県は47あり、政令指定都市は20ありますので、まだ3分の1でしかありません。これをどのように全ての府県・市において実施するか、また、各府県においても推進校以外にどのように広げていくか、ということについて考えていかなければなりません。このことを考えつつ、今後のオリンピック教育、パラリンピック教育の推進をはかっていきたいと思えます。

## 活動報告

### スポーツ庁委託事業 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について

筑波大学体育系、CORE 事務局 荒牧 亜衣  
CORE 事務局 大林 太朗

#### 1. 本事業の目的

2020年東京大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成27年11月27日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定している。本事業は、この方針の実現にむけて、スポーツ庁より事業委託を受けた筑波大学（CORE）が、宮城県、茨城県、京都府、福岡県の協力を得て学校や地域一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

具体的な内容は次の二点である。一点目は、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校（計120校：幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学）におけるオリンピック・パラリンピック教育の実施である。

表1 本事業で設定したオリンピック・パラリンピック教育のテーマ

- |  |
|--|
| ① オリンピズムの教育的価値（努力の喜び、フェアプレー、他者への尊敬、卓越性の追求、バランスのとれた身徳知）を普及させるための教育・啓発 |
| ② 「おもてなし」精神を備えた大会ボランティアおよび都市ボランティア等の養成を促進するための教育・啓発                  |
| ③ パラリンピックや障害者スポーツへの関心を高めるための教育・啓発                                    |
| ④ 日本文化や地域・郷土の文化への関心を高め、スポーツを通じた異文化・国際理解を促進するための教育・啓発                 |
| ⑤ スポーツを楽しむ心を醸成するための教育・啓発（体育嫌いの解消、マイナー競技への認知理解の促進）                    |

各推進校は、表1のテーマを参考にオリンピック・パラリンピック教育の実践を行った。なお、各推進校の実践に際しては、事前研修会として「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校セミナー」を開催し、理論的枠組みや筑波大学附属学校群における実践例の共有等を行った。また年度末には、推進校での実践に関する成果発表および情報交換のための事後研修として「オリンピック・パラリンピック教育ワークショップ」を開催した。

二点目は、公開フォーラムを通じた地域におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及である。フォーラムの開催に際しては、各府県で行政や教育、メディア、企業、スポーツチーム等の関係者からなる「府・県オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進コンソーシアム」を組織し、その内容について検討した。（図1）

#### 2. 推進体制

本事業の推進は、筑波大学のCOREを拠点に、各府県の教育庁と協力体制を構築した。各地域では、それぞれ1名のコーディネーター（担当課総括指導主事等）に教育庁内外の調整を依頼し、推進校の選定・統括、推進校セミナー、ワークショップ、コンソーシアムおよび市民フォーラム運営への協力を得た。

#### 3. 実施スケジュール

- 8月には、筑波大学内の推進体制の整備ならびに各府県の教育庁への協力依頼を行った。そして、各府県のコーディネーターおよび関係者を対象とした検討会を開催し、昨年度からの経緯を踏まえた本事業の概要と事務手続きに関するオリエンテーションを実施した。
- 8月～10月には、推進校セミナーを実施し、COREに蓄積された国内外のオリンピック・パラリンピック教育に関する基礎的情報を提供した。その後、各推進校では、前述の5つのテーマの枠組みを参考に各校の特色を生かした教育実践を

活動報告 ▶

展開し、成果と課題をまとめた。

- ・ 11～2月には、各府県でコンソーシアム会議を結成し、それぞれ1～2回の会議を開催した。有識者からの意見等をもとに公開フォーラムを開催し、地域のオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの推進を行った。
- ・ 2月には各府県でワークショップを開催し、推進校の実践に関する成果と課題を共有するとともに、グループワークを通して新たなアイデアに関する意見交換を実施した。
- ・ 3月には、事業の全体総括を行うとともに、スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課と各府県のコーディネーターが参加する検討会を実施し、今年度事業の成果と課題について意見交換を行った。

本事業の詳細については、COREのウェブサイト (<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/project28>) を参照されたい。



図1 事業の全体概念図

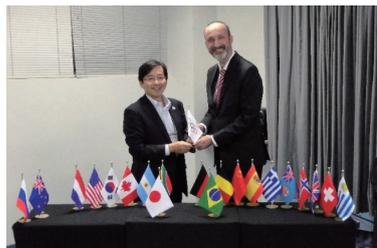
## 第2回オリンピック研究教育センターコロキウム報告

筑波大学体育系、CORE 事務局 宮崎 明世

第2回オリンピック研究教育センターコロキウム（2nd International Colloquium of Olympic Studies and Research Centres）が2016年8月2日～3日にブラジルのポルト・アレグレのリオグランデ・カトリック大学（PUCRS）で行われた。第1回のコロキウムは、2012年のロンドン大会の前にイギリス・ラフバラ大学で開催され、COREからも3名が参加して発表を行った。今回は第2回として、2016年リオ・デ・ジャネイロ大会を前に開催国ブラジルで開催された。会議には主催国のブラジルをはじめ、ドイツ、イギリス、ニュージーランド、ベルギー、オランダ、カナダ、南アフリカ、スペイン、アメリカ、オーストラリア、中国、日本から各国のOSCを代表して研究者が集まった。

キーノート・レクチャーでは、リオ・デ・ジャネイロ州立大学のダコスタ氏が「オリンピック・スタディ再考」と題して講演を行った。続いてIOC研究センターより、学術団体による共同研究の可能性について発表があった。その後、参加した各国OSCの代表が発表を行い、COREからも「東京2020に向けてのオリンピック教育の普及」（Spreading Olympic Education for Tokyo 2020）というタイトルで発表を行った。発表では、東京2020に向けた日本におけるオリンピック教育の取り組みについて、これまでの附属学校を中心とした実践例、スポーツ庁の委託事業が始まる前の授業づくりワークショップ、ソチにおけるオリンピック教育に関する調査、毎年度発行しているジャーナルについて、スポーツ庁の委託事業における取組などの観点から発表を行った。1日目の終わりにはポスターセッションも行われ、発表とともに情報交換が行われた。

2日目も引き続き各国のOSCの発表に始まり、開催国ブラジルから、オリンピック教育プログラムである”Transforma”について発表があった。午後には参加者が4つのグループに分かれて、「教育」、「ネットワークとコミュニケーション」、「普及」、「研究」のテーマでディスカッションを行った。この結果、オリンピック教育の大学レベルのプログラムやセミナー、ワークショップなどのサポートを行い、リストを作成すること、OSCの情報配信先一覧を作成すること、SNSの共有ページを作成すること、IOCのニュースレターを利用してOSCの情報交換に役立てること、オリンピック教育の研究成果をe-ジャーナルを活用して発信することなどの合意を得た。会議終了後、2017年4月現在これらの合意が実行に移されつつあり、次回大会の開催国である我が国も積極的にこれに参画することが望まれる。また、第3回オリンピック研究教育センターコロキウムを2020年東京大会の前に開催することとなり、開催に向けての運営グループが組織された。COREから真田教授が選出され、筑波大学オリンピックプラットフォームが次回コロキウムの開催を担うこととなった。国内でのオリンピック・パラリンピック教育の普及を進めると同時に研究を進め、諸外国のOSCとも連携しながら、次回コロキウム開催に向けて準備を進める必要がある。



## 第 8 回オリンピック教育フォーラム

CORE 事務局 大林 太朗

2017年3月6日、筑波大学東京キャンパス文京校舎において第8回のオリンピック教育フォーラムが開催された（要項は下記の通り）。

本フォーラムでは、宮崎明世氏（筑波大学体育系准教授）より、平成28年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」に関する報告が行われた。事業概要とともに、宮城県、茨城県、京都府、福岡県の各推進校における実践が紹介され、その特徴として以下の内容が挙げられた。

- ① 保健体育科中心に幅広い教科（算数、音楽、道徳、英語、総合的な学習等）での実施
- ② 各学校、地域における教育資源の活用（地元ゆかりのアスリート・プロスポーツチームとの連携、地域の特色あるスポーツイベントへの参画）
- ③ 事前合宿地（ホストタウン）誘致との連携（合宿内定国・地域との交流、学習等）

次に、中塚義実氏（筑波大学附属高校教諭）より、2016年12月23日～25日にかけて行われた第4回JOAユースセッション-ケーベルタン-嘉納ユースフォーラム2016の報告が行われた。国際大会と国内大会（選考会を兼ねて）の位置づけに関する紹介から、今回実施された野外教育プログラム、講義、障害者スポーツ体験やディスカッションおよびIOCの教材（OVEP）を用いた試みに関する内容が報告された。

質疑応答、ディスカッションでは、スポーツ庁事業および同ユースフォーラム等の今後の展開に関する意見交換が行われ、関係団体との情報共有を推進することが確認された。

### 開催概要

1. 日時：2017年3月6日（月）18時40分～19時30分
2. 場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎4階432教室
3. プログラム：

17時40分	開会挨拶
17時45分～18時05分	平成28年度 スポーツ庁委託事業 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」報告 宮崎明世（筑波大学体育系准教授）
18時05分～18時25分	第4回JOAユースセッション-ケーベルタン-嘉納ユースフォーラム2016 報告 中塚義実（筑波大学附属高校教諭）
18時25分	質疑応答・ディスカッション



## 日本オリンピックアカデミー 第4回ユースセッション in つくば クーベルタン — 嘉納ユースフォーラム 2016 実施報告 —

筑波大学附属高校、CORE 運営委員 中塚 義実

高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させることを主目的として、2年に一度、世界各国の「クーベルタンスクール」が集まり、「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」が開かれている。2017年8月19～26日、エストニアで開かれる第11回大会への参加生徒の選考を兼ねた標記フォーラムが、年末の筑波大学で開催された。2015年に続く2度目の開催であるが、今回は同時期中京大学でも開かれており、二つの国内 YF からの選考となった。また主催を JOA としたことから「第4回ユースセッション in つくば」という冠がつく形となった。

【主催】 特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー（NPO 法人 JOA）

【共催】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）  
特定非営利活動法人サロン 2002（NPO 法人サロン 2002）

【期日】 2016年12月23日（金祝）～25日（日）

【会場】 筑波大学：体芸棟 5C301、5C302、野性の森、虹の広場、第一体育館  
筑波研修センター：〒305-0005 茨城県つくば市天久保 1-13-5 Tel 029-851-5152

【参加校】 高校生 男子 14名、女子 16名、計 30名（女子 17名の予定だったが1名不参加）

- ・筑波大学附属高校 … 男6名、女8名 計14名
- ・筑波大学附属駒場高校 … 男3名 計3名
- ・筑波大学附属坂戸高校 … 男2名、女1名 計3名
- ・帝京高校 … 男2名、女3名、計5名
- ・自由学園 … 男1名、女4名、計5名（女子1名が体調不良で不参加）



【日程と主な内容】

< 12月23日（金祝） >

- ◆ 12:00～12:30 受付（5C301）
- ◆ 12:30～13:45 ガイダンス／参加校紹介
  - 1) あいさつ（真田久／CORE 事務局長）
  - 2) ガイダンス（中塚義実／NPO サロン 2002 理事長・コーディネーター）
    - ・本フォーラムの位置づけと全体日程
    - ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムとは
  - 3) 参加校紹介
    - 各校 5～10分で、事前に用意してきたスライドを用いて紹介した。
    - 更衣の後、「野性の森」へ移動
- ◆ 14:15～19:45 野外活動・飯盒炊爨

## 活動報告 ▶

・筑波大学野外運動研究室の坂谷充氏（筑波大学体育系特任助教）ほか4名のスタッフで進行。

### 1) 体ほぐし&グルーピング

- ・全体で簡易ゲームで体と心をほぐす（2人組の体ほぐし運動、ジャンケンゲームなど）
- ・男女今後、学校混合の4班づくり、それぞれに野外研究員の教員・院生・学生がつく

### 2) グループごとに A.S.E. (Action Socialization Experience)

円陣ボール投げ（名前を呼ぶ）／丸太の上を全員で移動／全員で手つなぎ→ほどく／全員で綱渡り  
／全員で壁を乗り越える／ターザン／地蔵倒し  
これらのうちからグループごとに4～5種目

### 3) 野外パーティ

- ・グループごとに異なる料理を作る

19:45 「野性の森」を出発

→ 徒歩で研修センターへ

20:00 研修センター着

入浴・自由時間

◆ 20:20～21:10 教師 MTG

◆ 22:30 門限

◆ 23:00 消灯



初日は天候に恵まれたのが何よりよかった。野外活動ではスタッフの方々の働きかけが素晴らしく、参加生徒は一気に打ち解ける初日のプログラムであった。

研修センターは個室なので、門限まではロビーや友だちの部屋で過ごすのが、23時の時点では男子も女子も静かに過ごしていたようだ（疲れ切っていたのかもしれない）。

## < 12月24日(土) >

◆ 6:30 起床・ラジオ体操

◆ 7:00 朝食 8:00 出発（徒歩約20分）

◆ 8:40～9:35

講義①ピエール・ド・クーベルタン（田原淳子／CIPC 副会長）

◆ 9:45～10:15

講義②嘉納治五郎（真田久／CORE 事務局長）

◆ 10:15～10:50

講義③ボランティアのおもてなしとマナー（江上いずみ／筑波大学客員教授）

◆ 11:00～12:30

演習①：OVEP教材を用いたグループ活動

「仮想 オリンピックミュージアム」

6グループづくり、「仮想 オリンピック・ミュージアム」を考える。考えたことを発表、さらに全員で彫像となる。

時間は限られていたが、生徒たちはよく考え、意見を出し合い、表現していた。もう少し時間があればもっと深めることができたろう。





◆ 12:30 ~ 13:45 昼食・休憩

- ・まずは全員で学生会館へ移動。  
嘉納治五郎像前で集合写真
- ・次に学生会館のギャラリーへ。
- ・全員で第二第三エリア（食堂が充実）へ移動。一時解散して昼食
- ・13:45 再集合。全員で「虹の広場」へ

◆ 14:00 実技①クロスカントリー

全員でコース確認、ウォームアップ。その後各自でアップ。1周760mの周回コースを、男子は4周、女子は3周。男子の5分後に女子スタート。  
男女の優勝者には真田氏より『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』が寄贈（真田先生サイン入り）

◆ 15:00 実技② スポーツ交流ーアダプテッドスポーツ

の体験 於第一体育館

筑波大学アダプテッド体育・スポーツ学研究室の杉山文乃氏（大学院生）ほか5名のスタッフが指導。

- 1) チーム分け・自己紹介
- 2) バラスポーツ体験
  - ①車いすポートボール
  - ②シットイングバレー
  - ③ボッチャ
- 3) パラリンピックについて
- 4) アダプテッドスポーツをつくろう



高価な（1台20万円）車いすでのポートボールはここでしかできない貴重な体験。しかしそれ以上に、自分たちに合ったルールを作って楽しむという「アダプテッド」の考えに触れ、「簡単な工夫でいろんな人とスポーツを楽しむ」経験が、生徒たちにとっては貴重だったと感じる。

17:40に実技終了。「筑波大学中央」バス停よりバスで研修センター付近まで移動。

◆ 18:30 夕食、入浴

◆ 19:30 演習②：オリンピック・パラリンピックについて

の英語による討議（使用言語は英語）

性別・学校が分かれるよう6班に分かれ、英語による討議を行った。テーマは「2020年に向けて自分たちには何ができるか」。21時になったら日本語解禁。翌日の発表（各班5分間でポスターを用いて発表）の準備を行った。

終わったグループから解散

◆ 21:10 ~ 21:40 教師 MTG

◆ 22:30 門限

◆ 23:00 消灯



グループ討議を終えて和室を出てからも、翌日の発表準備をしているところが多かった。各自の部屋へ戻ってからは、翌日の筆記試験の準備をしている生徒が多かったようだ。静かに寝ていた。

盛り沢山で密度の濃い一日だった。

## 活動報告 ▶

### < 12月25日(日) >

- ◆ 6:30 起床・ラジオ体操
- ◆ 7:00 朝食 → 8:00 ころ出発して筑波大学へ移動（徒歩約20分）
- ◆ 9:00～10:00 演習②の報告  
各班5分程度のプレゼンテーション。その後、質疑。
- ◆ 10:10～11:10 筆記テスト
- ◆ 11:10～12:10 クロージング  
スタッフ、引率教諭、コーディネーター（中塚）、スクールマスター（真田）の順に、大人全員がコメントし、最後に真田氏より修了証と記念バッジが各参加者に手渡された。

### 【参加生徒のコメント】

- ・ 野外活動で仲良くなった仲間たちと、2日目にはグループ活動で協力しながらオリビズムを学ぶというプログラムの流れがとて良かった。自然の中、講義室、体育館など、それぞれ場所も分野も全く違うプログラムなのに、そのどれもが2020につながる大切なものがぎゅっとつまった充実したもので、オリビズムは日常のいろいろなところに隠れているのだと気付いた（筑波大附1年）
- ・ クーベルタンの思想やアダプテッドスポーツの考え方など、自分が今まで考えていた部分とつながることもあれば全く新しい考えもあり、とても興味深かった（自由学園2年）
- ・ 他の学校の人たちとの雰囲気の違いに怖気づいていた部分も当初はあったが、同じ高校生同士すぐうちとけられた。他校の生徒はある意味異文化であり、それらと交流し合うことはとても楽しく、コミュニケーションの面白さの真髄を感じることができた（附属駒場1年）
- ・ 英語の討議では、最初は英語を話すことができない不安だらけだったが、実際にやってみると、英語が話せないなりに、自分の言いたいことを伝えることができたと思うのでおもしろかったし、いい経験になったし、少し自信がついた（筑波大附1年）
- ・ ここにきて感じた一番のことは世界の広さです。自分は留学して少し人と違うことをして浮かれていたけど、そうじゃだめだと実感した。まだまだ自分は井の中の蛙だと思った。ここに来てオリンピックやクーベルタンのことも吸収できたが、一番の収穫はこのことに気づけたことだ（帝京2年）
- ・ 今回のユースフォーラムを通し、改めてオリンピックの意義や、オリンピックの持つ教育的役割について知り、考えることができました。オリンピックはただ観戦するのではなく、オリンピックの持つ本質的な価値、パラリンピック種目への理解が大事であることを学びました。今回得た知識と意見をまとめて友人に伝える事が最も重要であると私は考えています」（附属坂戸1年）

2泊3日の国内 YF は、高校生にとっても大人にとっても充実した時間だった。

## 実践報告

### オリンピック・パラリンピック教育にかかわる教育活動

附属小学校 清水 由

#### 1. 各教科での取り組み

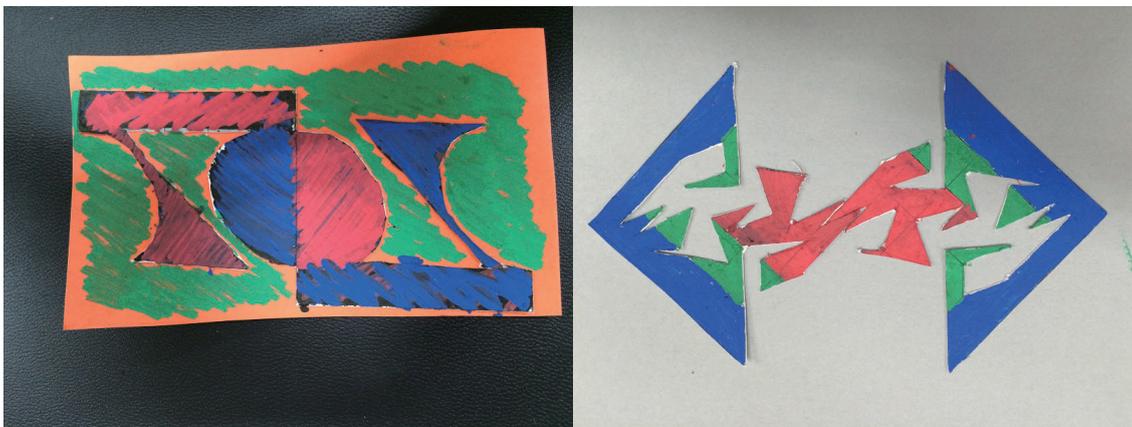
附属小学校では、オリンピック・パラリンピック教育のベースとなるようなグローバルな視点からの教育活動を中心に考えています。これまでも、各教科はもちろん、英語、総合、道徳といった教育活動全般において日本国内の文化はもちろん、国際理解に関わる授業実践を行ってきています。特に今年度は、総合の時間とリンクさせた算数科と図画工作科の授業実践にクローズアップして報告をさせていただいております。

##### ①算数科「星条旗の星の数」2年生

アメリカ合衆国について総合の時間で学び、その興味関心の延長線上で算数の授業を試みました。現在のアメリカに州が1つ加わり51州になったことを想定して実際に試作された星条旗を題材としての授業でした。2年生ということで、かけ算を使った授業でした。「 $50 + 1$ 」という数のとらえ方から「 $3 \times 17$ 」という捉え方に変わっていく子どもたちの様子が伺えました。

##### ②図画工作科「エンブレムの構想」6年生

オリンピックのエンブレムを子どもたちが考えていくという授業でした。教師の提示した条件の中で、子どもたちの豊かな発想を引き出し、相互鑑賞の中でシンメトリーの並びのよさに気づいていくような授業でした。



##### ③体育科「フェアプレイ」3年生

大塚地区の附属小・中・高等学校で毎年共同開催している合同研究会において、「フェアプレイ」をテーマに公開研究会を行いました。小学校は3年生で「長縄2人跳び」と「コーンボール」の授業を行いました。

「長縄2人跳び」では、みんなで記録をつくっていく過程における葛藤場面に着目をしました。また、「コーンボール(攻防分離・攻守交代型の当てゲーム)」でも、ゲームに勝つことを目的として楽しく活動する中で、相手チームや自分のチームの行動(プレイ)について葛藤する場面に着目をしました。

授業を展開する中で、集団で記録をめざしたりゲームを楽しむという活動だからこそそのリアリティーのある葛藤場面に着目して「フェア」にプレイしていくということを子どもたちが話し合っていく授業でした。

#### 2. 全校児童への取り組み

##### ①全校朝会(眞榮里教諭)

眞榮里教諭が全校が集まる朝会でオリンピックの歴史や創設理念の話を行いました。近代オリンピックが行われるようになった理由、日本人の参加の歴史、行われてきた種目などをクイズ形式で子どもたちにわかりやすい形で行いました。

まとめとして、このような国際的なオリンピック大会が開かれるには、平和であることやさまざまな国の人々がお互いに理

## 実践報告 ▶

解し合うことの大切さを強調し、オリンピックには「参加することに意義がある」という言葉があることを伝えていました。

### ②全校朝会（山田教諭）

山田教諭も、眞榮里教諭と同様に朝会で全校を対象に「夢を追い続けること」をテーマに話を行いました。メダリストの北島康介さんをはじめとして、トップの一流選手（錦織圭さん、本田圭佑さん、イチローさん、等）が小学校のころに書いた作文を子どもたちに紹介しました。彼らの夢は一樣に世界で活躍する選手になることであり、そのために非常に多くの練習を努力していく覚悟を書き綴っていたという事実です。特に卒業を目の前にした6年生の心に響く話でした。



### ③創立記念式典での講演（江上いずみさん）

創立記念式典という行事において、全校を対象に国際的に通用する「おもてなしの心」についてご講演いただきました。江上さんは、本校の卒業生であると同時にご息女も卒業させました。そのような経験も含め、子どもたちにとって心に残るお話をいただくことができました。特に、マナーの具体的なところでわかりやすいお話をいただき、「分離礼」や「握手の仕方」「ノックの仕方」など、相手の気持ちを考えて行うことが大変に大事であることを子どもたちは学びました。翌日からすぐに実践できることも多く、子どもたちも楽しみながら実践をしていました。



## 附属中学校の取り組み

附属中学校 國川 聖子

平成 28 年度の本校の「オリンピック教育」は、これまでを踏襲しながらも、保健体育科を中心とした内容に限らない、多様な場で展開することができた。本校の教育課程は、「教科領域」と「活動領域」の 2 領域で構成されており、前者を「教科学習」と「総合的な学習の時間」、後者を「HR 活動」と「実践的活動」と区分し、全ての教育活動を行っている。

以下、それぞれの領域における活動を紹介する。

### 1. 教科学習

#### (1) 英語科

教科書「NEW CROWN 1」(pp.87-93)Lesson7「Sports for Everyone」において、助動詞 can を理解し使う学習の題材として、「Wheelchair Basketball」と「Goalball」が取り上げられている。質問をしたり相槌をうったりして会話を続ける中で、いろいろなスポーツに関心を高めたり、スポーツ紹介の説明文を読んで、そのスポーツの動きや使用する用具の特徴を読み取ったりする。その中で、なぜタイトル Sports for Everyone がつけられたのかを考え、表現する問いがたてられており、他者理解やスポーツの持つ力に触れる場となっている。この教科書には、他に、剣道、バスケットボール、バレーボール、テニス、野球、サッカー、クリケットなどが登場している。

#### (2) 数学科

教科書「新しい数学 2」(pp.8-10)1 章「式の計算」、いくつかの文字をふくむ式の計算や文字を用いた式を使って数の性質を説明することについて考えていく節における題材で、体育祭実行委員の生徒が、運動場にトラック競技のレーンをつくるにあたり、スタート・ゴールラインの位置や距離を導き出すために考えを深めていく内容になっている。運動・スポーツを「する」だけではない、環境をつくるための数学的な視点を学ぶ場となっている。

#### (3) 保健体育科

- ①「保健」と「体育理論」において、「オリンピック単元」と題して以下の内容を行った。
  - ・オリンピック(古代・近代)シンボル・近代オリンピックの課題や問題点・パラリンピック
  - ・ブラインドサッカー体験・パラリンピック競技の用具・パフォーマンスを支える科学
  - ・薬物乱用・アンチドーピングとフェアプレイ・スポーツの価値
- ②第 12 回 筑波大学附属小・中・高等学校 体育・保健体育科合同研究会において、「フェアプレイ精神を育む体育授業」として実践報告・研究協議を行った。

授業内容：具体的な事例から「フェアプレイとは何か」を理解する。

例) 運動会での選手宣誓、オリンピック・パラリンピック、ユネスコの国際フェアプレイ賞など
- ③運動会での競技種目でもある、仲間と息をあわせて動き方を工夫する「ムカデ競争(6～7名)」。JICA(国際協力機構)課題別研修「学校体育」研修員の先生方の来校にちなみ共に体験し交流を深めた。



## 実践報告 ▶

### 2. 総合的な学習の時間《対象者：各学年コース選択者 20～30名》

#### (1) 2年生 理科的な視点

〈コースのねらい〉観察力や考える力（科学的な思考力）を養い、課題意識や問題意識の持ち方を学び身につけること。さらには、家庭科や保健体育科、家庭生活や社会、歴史、文化など、理科と関連する多様な事象を学ぶ。広い視野をもち、日々の知識や授業での学習の総合科を図ること。

〈一部内容〉禁止薬物・ドーピングにかかわる新聞記事を取りあげ、科学的な視点での考察を行った。

#### (2) 2年生 保健体育科的な視点

〈コースのねらい〉日本の体育・スポーツやその文化を調べ、世界へ発信する。さらには、外国人留学生の方々との交流会でその成果を発表し、異文化圏の方々の考えを知る。

〈一部内容〉留学生との交流会を開催：英語での挨拶や互いの自己紹介、アイスブレイク、研究成果の発表、留学生からの感想や質問を伺うなど。

#### (3) 3年生 保健体育科的な視点

〈一部内容〉オリンピックを測るものさしを考える：メダルの数、記録、得点、参加選手数…オリンピックが語られる時、その価値や規模を評価する指標は様々である。勝敗や記録にとどまらないオリンピックの意味を考えながら、その指標を多様に柔軟にとらえていく。中学生にとっての「オリンピック観」が語られた。

### 3.HR 活動

2年生では、学年目標「志と絆を大切にしよう」の一部である「他者理解、多文化理解、異文化理解」「視野を広げる」「自分たちで課題を見つける」にちなんで、ホームルームの時間に様々な取り組みが行われた。

〈一部内容〉調べ学習（身近な社会・環境・バリアフリー・ユニバーサルデザインなど）、「ボッチャ」体験、高齢者擬似体験、義足のパラリンピアンへの講演・意見交換会、スポーツ交流会の実施（パラリンピック種目を含む）



### 4. おわりに

今回の報告では、中学校での学びの中核をなす「教科学習」において、各教科のねらいを達成するための題材の中に、オリンピック教育と捉えられる内容を確認することができた。また、上記の他に保護者主催の講演会において「オリンピック教育の動向」「本校でのオリンピック教育事例」を紹介する場を設けることができたことは大きな成果である。保護者への理解の輪を広げることができたことで、生徒たちの学びの可能性がより広がっていくことを期待したい。

来年度も、これまで同様に「中学校」として各教科の特徴を活かした実践を把握するとともに、様々な場面での実践の可能性を探っていきたい。また、平昌オリンピックが開催される来年度こそ、大会の「事前」「開催期間中」「事後」といったそれぞれの「時」を活かした学びのあり方を探る好機としていきたい。

### 1. 第4回ユース・セッション in つくばクーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2016 への生徒派遣

#### (1) 概要

- 日 時：2016年12月23日（金祝）12時～25日（日）12時  
場 所：筑波大学筑波キャンパス（茨城県つくば市天王台 1-1-1）  
筑波研修センター（茨城県つくば市天久保 1-13-5）  
主 催：特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー（NPO 法人 JOA）  
特定非営利活動法人サロン 2002（NPO 法人サロン 2002）  
共 催：筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）  
参加者：生徒 30 名中、本校生徒が 14 名（男子 6 名、女子 8 名）が参加。

本校の他に、附属駒場高校、附属坂戸高校、帝京高校、自由学園高校（男子部・女子部）生徒・引率教員が参加した。スタッフとして CORE から真田久筑波大学体育系教授、宮崎明世准教授、荒牧亜衣特任助教、大林太郎特別研究員が参加され、NPO 法人サロン 2002 から安藤裕一理事、嶋崎雅規理事、小池靖スポネットサロン 2002 メンバーにお世話になった。また、講師として田原淳子国士舘大学教授（CIPC 副会長）、江上いずみ筑波大学客員教授、坂谷充筑波大学体育系特任助教、筑波大学アダブテッド体育・スポーツ研究室の杉山文乃氏から講義演習を受けた。さらに、国際ユースフォーラム経験者として本校卒業生の皆川宥子（日本女子大学 3 年）が参加し、参加生徒への確かなアドバイスをを行った。コーディネーターは本校の中塚義実が務めた。

#### (2) 告知・募集および事前学習

本フォーラムについて 10 月 6 日（木）、前期末試験後の全校集会で生徒全員に告知した。その際、2 年前にスロバキアで開かれた「第 10 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」に日本代表として参加した 3 年生の高橋優衣が、国際 YF とその派遣生徒選考会でもあるクーベルタン-嘉納ユースフォーラム（国内 YF）について全校生徒に説明した。

10 月下旬までに、14 名の生徒（1 年生 11 名、2 年生 3 名）が参加の意志表示をした。この段階では本校からの国内 YF 派遣生徒数が未確定だったことから、「全員が国内 YF に参加できるとは限らない」との前提ではあったが、11 月から定期的に集まり事前学習を行った。日本のスポーツのあゆみと嘉納治五郎の功績について理解を深めることと、14 名全員で課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう（日本語）」に取り組むことが事前学習の中心である。課題の意図は、日本の学校体育のルール校ともいえる本校のことを学ぶことがまず必要であるということである。

最終的には 14 名全員が国内 YF に参加することとなり、事前学習で作成したものを修正し、国内 YF 初日の学校紹介で活用した。

事前学習の日時と概要は以下の通りである。多忙な生徒たちは、昼休みには委員会、放課後には部活動がある。そこで勉強会の日時は特定の曜日に偏らぬよう、生徒自身が相談して決めた。

第 1 回：11 月 2 日（水）15：10～15：50

- ①国内 YF の位置づけと概要
- ②今後の「オリンピック教育」勉強会の進め方について

第 2 回：11 月 10 日（木）15：10～15：50

- ①DVD「嘉納治五郎ースポーツを通した人間教育」をみて嘉納治五郎の功績を学ぶ
- ②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」についての自由討議

第 3 回：11 月 18 日（金）15：10～15：50

- ①DVD「日本のスポーツ 100 年ダイジェスト版」をみて、日本スポーツのあゆみを学ぶ
- ②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」の進捗状況報告  
歴史班・行事班・学校の特徴班に分かれてまとめる作業を進める

## 実践報告 ▶

第4回：11月30日（水）15：10～15：50

①国内 YF の概要

②課題「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」の進捗状況報告

第5回：12月8日（木）15：10～15：50

「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」発表会（各班5～10分のプレゼンテーション）

第6回：12月19日（月）11：30～12：10（後期中間試験最終日）

国内 YF 準備（最終確認）

### (3) フォーラムに参加して

本フォーラムは、日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させるとともに、第11回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（2017年8月エストニアにて開催）への参加者7名を選考する場でもあったため、参加する生徒達の意識も高く、意欲的な取り組みが随所に見られた。今回の新しい試みとして、①IOCが開発したOVEP（オリンピックの価値教育プログラム）を用いた演習、②アダプテッドスポーツ体験、などが挙げられる。①は講義で学んだ内容をふまえ、グループで「仮想オリンピック・ミュージアム」の構想を考え発表するという課題が与えられた。ミュージアムのコンセプト・対象・会場・展示の工夫・象徴するアスリートなどを考えさせるだけでなく、「身体と意志と心のバランスを表現する彫像」という表現課題も提示され、プレゼンテーションにもグループ構成員全員の表現が求められる課題となっていた。②は車いすポートボール、シッティングバレー、ボッチャなど、さまざまな人々が楽しめるパラスポーツを体験することで、生徒の理解深化や意識変容が見られた。3日間の活動を通して、他校の生徒と交流を深め、英語によるディスカッションやグループでのプレゼンテーションの機会を得て、生徒の成長する姿を見ることができた。



表現課題「身体と意志と心のバランスを表現する彫像」



アダプテッドスポーツ体験（車いすポートボール）

## 2. スーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) としての取り組み

採択を受けて3年目、「SGH スタディ（総合的な学習の時間・土曜日実施各学年1単位）」が始動して2年目となるが、初めて3学年（前期集中2時限実施）が同時進行で取り組むこととなった。オリンピック教育に関連する部分を以下に示す。

### (1) 第3学年の概要

昨年度の研究活動を継続し、4～6月に最終報告（論文作成）、7月に最終発表会、9月に優秀研究発表会・表彰、まとめ・アンケート調査がおこなわれた。各グループの生徒たちは Google Classroom 上に置いたテンプレートをダウンロードして、A4判で8～15ページ（およそ1～2万字）の論文作成に取り組んだが、特に苦労していたのは英文と和文で執筆を課された Abstract（梗概）である。和文で400字程度、英文100語程度で作成した。

内容的な要件として、「研究課題・目的・課題設定理由・研究の意義・先行研究のまとめ・研究方法と過程・結論（結果と考察）・今後の課題」を含むこととした。また、分担執筆が基本となるため、文責が明らかとなるよう注意を促した。最終発表会では、各グループを8会場に割り振り、2週にわたって発表を行った。各グループは発表10分、質疑4分の時間が与えられ、分野を横断する形で自分達と異なる分野の研究発表を聞くことになった。教員は発表の動画記録やプレゼンファイルなども参考に、優秀グループの推薦をおこない、優秀論文を選出した。①分野（オリンピック・パラリンピックにおける諸課題）から選出された優秀論文およびその他の研究テーマは以下の通りである。

- 優秀賞 東京オリンピックを見据えたインフォメーションアプリの開発
- 優良賞 オリンピズムの具現化～オリンピックとパラリンピックのあり方～
- 敢闘賞 シットイングバレーを広めたい～ためしてシッティン～

#### その他のテーマ

- ・東京オリンピック開催に向けての首都直下地震の対策
- ・にわかファンの存在意義
- ・反オリンピックについて
- ・スポーツの魅力と有名選手の関係
- ・オリンピックにおける野球の戦略的勝利法～統計的観点と物理的観点から～
- ・スポーツの魅力
- ・日本サッカーの振興への研究
- ・新しい障がい者スポーツを作ろう
- ・体幹について
- ・日本のスポーツ実績向上に伴う金銭面マネジメントの重要性について
- ・テレビとオリンピックの関係について～東京オリンピックの理想の形～
- ・アフリカでオリンピックは開催可能か
- ・2020年東京オリンピックに際して新設される施設の後利用について
- ・オリンピック選手を取り巻く環境～マルチサポートの実態と改善～

### (2) 第2学年の概要

昨年度とほぼ同じ流れで実施された。4月にオリエンテーション、SGH スタディで取り組む3分野（①オリンピック・パラリンピックにおける諸課題、②地球規模で考える生命・環境・災害、③グローバル化と政治・経済・外交）の紹介、教員によるミニ講義などを行い、5月から7月にかけて仲間探し（研究グループ形成）とテーマの焦点化を行い、9月から本格的な研究活動に入った。1月には2週にわたって中間発表会を行い、代表に選ばれた3グループが、2月4日に開催されたSGH活動報告会で発表を行った。各グループの研究テーマと人数は以下の通り。

- ・アスリートと怪我（女子5名）
- ・肉体的疲労とパフォーマンスの関係性（男子4名）
- ・サッカー選手のセカンドキャリアについて考える（男子3名、女子1名）
- ・競技の認知度とオリンピック・パラリンピックの関係（男子3名）

## 実践報告 ▶

- ・バリアフリー・ジェンダーフリーから見るオリンピック・パラリンピック施設内におけるトイレの表記についての考察と提案（女子4名）・・・代表発表
- ・アスリートを身近で支える人々（女子6名）
- ・マイナースポーツとメディア（女子4名）
- ・街中のマークを改善しよう（女子6名）
- ・東京オリンピックの知名度を上げよう（男子2名、女子1名）



2年生の中間発表会（模型を見せながらトイレのデザインをプレゼン）

### 3. トーマス・バッハ IOC 会長来日記念特別式典への生徒派遣

時間的な余裕のない中で生徒へ呼びかける形となったが、7名の生徒が希望し、抽選で2名の生徒が参加した。参加した生徒の報告書を以下に紹介する。

#### トーマス・バッハ IOC 会長来日記念特別式典報告書

2016年10月22日

1年1組 儀賀柚奈

10月20日（木）筑波大学東京キャンパスにて IOC 会長の来日記念特別式典が開かれた。この日バッハ会長は筑波大学の名誉博士号を授与され、「オリンピックの価値～スポーツと教育の役割」というテーマで特別レクチャーを行った。バッハ会長の他に、森喜朗会長・永田恭介学長・竹田恒和会長・小池百合子知事・鈴木大地長官が登壇し、それぞれ東京五輪に向けてスポーツ教育について各々の考えを述べた。ここでは簡単にそれぞれの話をまとめる。

●永田恭介（筑波大学学長）

筑波大学がオリンピック教育や国際交流に力を入れていることについて言及し、その上でバッハ会長のこれまでの取り組みに対し敬意を表していた。この会に筑波大学の附属校生徒が出席していることも紹介していた。バッハ会長に名誉博士号授与の際、記念品として漆の工芸品を渡す。

●森喜朗（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長）

筑波大学の歴史を喜びに披露し、東京五輪に向け、バッハ会長を父のような存在として共に協力していく旨を話した。

●竹田恒和（公益財団法人日本オリンピック委員会会長）

オリンピックムーブメントを若い世代に広げるために尽力することを話していた。

●小池百合子（東京都知事）

東京五輪ではアスリート・ファーストの方針で、IOC としっかりと連携し都として出来ることをしていくことを、自信を持った様子で話していた。

●鈴木大地（スポーツ庁長官）

アンチドーピングをはじめとするバッハ会長の取り組みに賛成の意を示す。筑波大学の TIAS (Tsukuba International Academy for Sport Studies) という団体については、「実践的な人材育成」の場であるとして紹介していた。

●トーマス・バッハ（国際オリンピック委員会会長）

嘉納治五郎、クーベルタン男爵が「教育」によってスポーツ界のプラットフォームを築き、今筑波大学がオリンピック教育に深くかかわっていることから話を始めた。グローバルな教育の現場において筑波大学は革新的な方法をとっていると述べ、東京五輪に向けて「日本のやり方でスポーツの価値観を生きる」ことを推奨した。話はグローバル化に移り、オリンピックには柔軟性とコスト削減つまり「アジェンダ 2020」が欠かせないと宣言した。クーベルタン男爵やネルソンマデラの言葉を借り、東京五輪に強い期待を語った。

まず驚いたのが、中学の頃からよく耳にしていた嘉納治五郎の名前を登壇した全ての人が口にしたことだ。今まで身近すぎてその偉大さを理解できなかったが、この会でいかに嘉納治五郎がオリンピック教育に尽力したかが分かった。もう一つは、バッハ会長のレクチャーで話の内容が「教育」から「アジェンダ 2020」の重要性へ視点が変わったことに、会長の将来展望への強い意志を感じた。スポーツとしてではなく経済的に考えるオリンピックの話は私にとって新鮮で、思わず同時通訳用の機械を付け忘れる程だった。改めてこのような現場に出席できたことをうれしく思う。

### トーマス・バッハ IOC 委員長来日記念特別式典参加についての報告

2年4組花渕真生

私は先日、トーマス・バッハ IOC 委員長来日記念特別式典に参加してきました。バッハ会長の講演はもちろん、小池百合子東京都知事、森喜朗組織委員会会長、竹田恆和 JOC 会長、鈴木大地スポーツ庁長官といった、今話題の方々のお話も聞くことができ、とても有意義な時間になりました。

今回は、バッハ会長に筑波大学名誉博士の称号授与と会長の特別講演会を実施するという趣旨の式典でした。筑波大学とオリンピックをつなげるものとして最初に挙げられるのは、筑波大学の前身校の校長を務め、アジア初の IOC 委員ともなった嘉納治五郎先生です。私も中学生の時から、体育や総合学習の時間で、先生について学習していたのでそれなりの知識はありましたが、いつもテレビで見ているような有名な人の口からそのお名前が出ると、改めてその偉大さを感じました。武道館に飾られた額の中におじいさんではなく、優れた競技者、教育者だったということをお忘れはいけません。

バッハ会長は、「オリンピックの価値～スポーツと教育の役割～」のテーマで（英語で）講演をしてくださいました。その中でも印象に残っているのは、スポーツも教育も、最後には世界平和につながるという言葉です。もともとは平和の祭典だったオリンピックも、現在ではメダル至上主義とも言われるほど、その意味が変化してきているように感じます。そのような中でも、スポーツには本来、世の中を変える力があり、オリンピックはその力を伝える舞台ともなりうるのだということを改めて考えさせられました。

平和の祭典オリンピック、そしてそれを伝えていく教育、本校で行われているオリンピック教育は、バッハ会長のおっしゃっていたことを体現していると思います。2020年には東京五輪が待っています。そこに向けて、私もできることから考えようと思いました。

#### 4. OVEP に関する教員研修会への参加

平成 28 年 10 月 18 日に虎ノ門ヒルズで開催された、オリンピックの価値教育プログラム（OVEP）に関する教員研修会に本校から教員 2 名が参加した。他の附属学校教員の他に他県からの参加者もあり、演習を多く取り入れたプログラムは自分の専門教科の授業の参考になった。

## 2020年東京オリンピックに向けての取り組み

附属駒場中・高等学校 横尾 智治

### 1. 東京オリンピックのレガシーについて

本校の体育館は1964年の東京オリンピックのときに東洋の魔女と言われた女子バレーボールチームの練習会場に使用された。中学3年生と高校1年生の保健体育の授業において1964年の東京オリンピックのレガシーについて学習し2020年の東京オリンピックのレガシーについて想像してみようという取り組みを行った。

感想としては「渋谷を含む都市部の再開発に拍車がかかり都市部を中心に『New Tokyo』へと進化する。また公共事業が増えるため雇用が増大し、経済的な効果も望むことができる。」などの多様な意見が出た。



2020年の東京オリンピックレガシーについて考える

### 2. トーマスバッハ会長記念式典参加

2016年10月20日に4名の生徒が、筑波大学東京キャンパスで開催された記念式典に参加した。バッハ会長から2020年東京オリンピックは、日本におけるオリビズムを日本独自の方法で表現し、世界に向けて発信できる絶好の機会だという内容の講演がされた。生徒の感想としては「(来賓などの顔ぶれから) バッハIOC会長の影響力の大きさがわかった。オリンピックの規模の大きさを感じた。」などがあつた。

### 3. 国内 YF 参加

2016年12月23日～25日に生徒3名が、筑波大学つくばキャンパスにて「日本オリンピック・アカデミー第4回 ユースセッション in つくば ～クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2016～」に参加した。3名は最初の講義でも積極的に質問しており全活動を通じて意欲的に行っていた。1名は2日目のクロスカントリーで男子参加者中第1位と優秀な成績を残した。感想としては「3日間を通して多くの経験をする事ができ本当に新鮮だった。今後もオリビズムやこの経験を忘れずに活かしていこうと思う。」などがあり刺激的で達成感は非常に大きかったようだ。



国内 YF

---

#### 4. TIAS 来校 OVEP プログラム実施

2017年3月9日に Tsukuba International Academy for Sport Studies(TIAS)の方がバスで来校し Olympic Values Education Programme(OVEP)を実施した。駒場の中学1年生と2年生の21名が参加した。概要としてはオリンピックの価値を簡単な身体活動を通して考えようというものである。そのときの言語は英語である。中学生は英語に戸惑いながらも身体活動を通してなんとかコミュニケーションをとろうと頑張っていた。オリンピック教育が掲げる5つの教育的価値「努力する喜び (Joy of effort)」、「フェアプレイ (Fair play)」、「他者への尊重 (Respect for others)」、「卓越性の追求 (Pursuit of excellence)」、「バランスのとれた身徳知 (Balance between body, will and mind)」について触れる良い機会となった。



TIAS の OVEP 集合写真

## 附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

本校は2014年度より、文部科学省からSGHの指定を受け、グローバル社会に資する人材を育成する教育実践の重点活動として「オリンピック・パラリンピック教育」を位置づけ、学年全体で取り組んでいる。前年度の活動から発展したことや新たに加わった活動についていくつか紹介する。

筑波大学附属坂戸高等学校 オリンピック・パラリンピック教育年間指導計画(2016:体育科・福祉科関連分)

学年	教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1学年	LHR 産業社会と人間	特別支援学校との交流学習 クラスごとで年一回附属または近隣の特別支援学校と交流												
	体育	「バレーボールI」 ハンドリング確認ゲーム「シングリングバレーボール」 カバリングスキル向上ゲーム「ペンボール」						持久走 オリンピックとの有酸素能力比較						
2学年	自由選択科目 体育を科学する	ICTを用いて「バイオメカニクス」「運動評価」を学ぼう 50m走・ハンドボール				共同学習 事前指導	スポーツ交流I in大塚	ボランティア学習事前指導 アダプテッドスポーツ体験学習	アダプテッドスポーツを考えようI	スポーツ交流学習II in坂戸	スポーツ交流学習III in筑波			
	自由選択科目 福祉援助技術	「バレーボールII」 簡易ゲーム「レクリエーションバレーボール」				知的障害とは		障害者スポーツ ボランティア学習	アダプテッドスポーツを考えようII	持久走 地域スポーツへの参画に関する準備				
3年次	体育 体育理論							アダプテッドスポーツにチャレンジ フライングサッカー・ゴールボール オリンピックの記録と技術の関係	パラリンピックを変えるテクノロジー			ニュースポーツにチャレンジ アルティメット・インディアカ ・ネオホッケー		
全体	課外活動・行事							共生社会シンポジウム ブース運営	地域のスポーツ行事参加 校内マラソン大会 with 坂戸チャリティマラソン	クワベルタン 和崎治五郎 ユースフォーラム	青年学級交流		青年学級交流	

### 1) 特別支援学校とのスポーツ交流学習 (体育科・福祉科)

本単元は様々な体験・交流学習をもとに「日本における障害者と健常者についての心のバリアフリーに関する課題」の解決について学習した。それぞれの授業の目標は以下のとおりである。

「体育を科学する」 スポーツの有する個人的・社会的に豊かな価値を理解し、それら活動を主体的に行う・支える・観る資質についてスポーツを科学する視点から身につける。

「介護福祉基礎」 援助が必要な人が“地域”で生活を送ることを考える。知識及びその技術を学習し、適切に行う能力と態度を身につける。

1学期はそれぞれの科目で基礎的な知識・スキルを学び、2学期に協働単位として「パラリンピック教育」を設定した。

単元の目的 パラリンピックが開催されることの意義について理解するとともに、日本で行われている障害者スポーツへの理解を深める。また健常者と障害者がノンバーバルな社会環境を築くために、

(体育を科学する) スポーツがどのような価値を有しているかについて考える。

(福祉援助技術) 現在の障害者と健常者を取り巻く社会環境について理解を深め改善を考える。

筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒(以下「大塚生」と)と8月25日(水)26日(木)と11月11日(金)、12月17日(金)の計4日交流を行った。障がいなどの多様さを認め包含していくことは、自分が所属する集団の中にある多様さを認めることの延長線上にある。昨年の活動が協働性・共同性の活動であった反省から、今年度はよりそれぞれの専門性を活かせる形で行った。そうした活動を通じて、ある生徒が「今までは“障害者”という線の色が濃かったが、交流を通して段々と薄くなっていった」と述べたように、自分が所属している集団とは別の集団として障がい者がいるという認識ではなく、同じ集団(社会)のなかに障がい者もいるという認識を得ることができた。



アダプテッド・スポーツ開発会議



考案スポーツ「クワッドゴールボール」



全ての交流を終えて記念撮影

### 2) ドイツヘッセン州スポーツユエグントの学生とスポーツ・ディスカッション交流 (体育科・英語科)

体育協会の日独交流プログラムに本校が協力する形で行われました。スポーツを多面的に捉え、その価値と活用について探

求する科目「体育を科学する」の受講生徒と、英語の流暢性と思考力を高める課外授業「ENGLISH CARAVAN」受講生徒が協働して企画立案を行い、①スポーツ交流 ②日本の学校および文化紹介 ③「フェアプレーとは何か」についてのディスカッションが行われた。

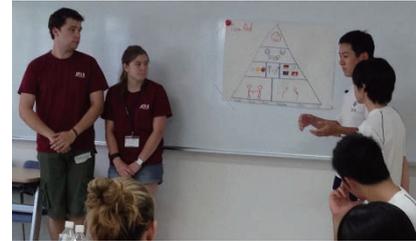
対面時は緊張を隠せずいた両学生も、「キンボール」というコミュニケーションを図りやすいスポーツを通じて打ち解け、より言語スキルを必要とする活動へスムーズに移行することができた。「フェアプレー」についてその概念的意味や価値をディスカッションする際には、ドイツの学生（16～22歳）の英語力や概念理解の高さに驚きながらも、協働して成果を得ようと必死にチャレンジする姿、相手の国民性からくるアプローチの違いを受け入れ、よりよい議論を進めようとする生徒の姿があった。



キンボールでスポーツ交流



かるた部による実技披露



成果発表の様子

### 3) 体育における「ニュースポーツ・アダプテッドスポーツ」の積極的導入

学校で必修として実施される最後の「体育」は、主体的に身体活動を継続していく素養を育むために全員が受ける最後の教育機会といっても過言ではない。多様な人に開かれた社会の中で、誰とでも、どこでもスポーツを楽しめる人材の育成には、スポーツの楽しさの認識を「強化」「拡充」していく必要がある。本校では3年次の科目「体育」において、アダプテッドスポーツ（6時間）レクリエーションスポーツ（10時間）を組み入れ、多様なスポーツを経験することで、スポーツの本来的な楽しさを再確認しながら、多様なスポーツを楽しむ人々の「卓越性」や「個性」を理解・尊重し、「協働」を楽しめる素養の獲得を目標に実施した。

今年度実施したスポーツは以下のとおりである（これらの中から選択し3種目を実施）

- ・キンボール ・ゴールボール ・ブラインドサッカー ・水球 ・ネオホッケー
- ・アルティメット ・インディアカ ・スナッグゴルフ

### 4) 国語科の取り組み

1年次の国語総合において、各クラスの担当教員がオリンピックを教材とした授業を実施した。実施した内容と目標は以下のとおりである。

#### ① 「新聞記者に挑戦」

目標：オリンピックの新聞記事を読み、見出しを考える活動を通して、効果的に表現するための工夫に気づくとともに、スポーツ報道やオリンピックについて考えを深める。

#### ② 「キャッチコピーについて考えるオリンピック競技大会とは」

目標：1964年東京オリンピックの大会ポスターについて理解させ、「相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書くこと」の指導を行う。オリンピック競技種目ごとの身体性について理解しようとする意欲を育むと同時にポスターが果たす役割やキャッチコピーの有効性について考えることができる。

生徒の感想として「普段スポーツをしない自分でも、見出しからスポーツをとらえることは新鮮であり、これからやってみようという気持ちになった。」「スポーツの写真を見ると自分も近くにいるような不思議な気持ちになれて高揚感を感じることができた。3年後のオリンピックが楽しみである」といった意見が聞かれた。

〈国語総合30〉 1年（ ）組（ ）

よりよい表現を求めて～新聞記者に挑戦！～

1. 新聞の特徴  
(1) 文章の特徴  
○ [ 5W1H ] の要素を入れる。

(2) 紙面構成 (トップ記事)  
a カット見出し  
b 主見出し  
c 副見出し

○ [ 逆三角形 ] で作られる。

2. 見出しを考えよう～オリンピック記事を題材に～  
○ 見出しとは…記事の [ エッセンス ] を [ 短く簡潔 ] にまとめたもの。  
→ 記事を書いた記者ではなく、第一読者である読者記者が付ける。  
(1) 新聞の [ 見出し ] を作る。理由：読者に記事の要点を伝える。  
○ 記事を読み、空欄に入る言葉を考えよう。<平假名>の記号で補綴にできるような漢字に線を引く。  
○ ①を元に、おもしろい言葉を考える。

(2) 本稿  
\* 単独の考え  
A [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：平假名で読みやすいため。  
B [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：選手が活躍した。  
C [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：選手が活躍した。  
\* グループの意見  
A [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：選手が活躍した。  
B [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：選手が活躍した。  
C [ 選手 ] の [ 活躍 ] 理由：選手が活躍した。

この カット見出し、主見出し、副見出しは、記事の要点を短く簡潔にまとめたもの。自分も近くにいるような不思議な気持ちになれて高揚感を感じることができた。3年後のオリンピックが楽しみである。

**2016年リオデジャネイロパラリンピックに参加して感じた事。  
2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて思うこと。  
生徒たちに伝えていきたいこと。**

附属視覚特別支援学校 寺西 真人

今回も本来の趣旨から外れるが、リオデジャネイロパラリンピックに参加して感じた事を紹介したいと思う。

自分は、アテネ大会から4大会連続パラリンピック日本選手団水泳コーチをさせていただいた。身に余る光栄なことであると思いつつ、日々責任から押しつぶされそうな生活を送ってきた。正直ロンドン後も、長い4年間であったと思う。

本校からは多くのパラリンピック選手を輩出してきた。それだけに他の学校よりパラリンピックは身近なものである。一方で身近過ぎてパラリンピックの規模や世界最高峰の大会である認識が薄れていた傾向もあった。2020年東京が決定し、更に、オリンピック・パラリンピックと横並びに報道され、更にリオデジャネイロパラリンピックの様子がテレビ放送されたおかげで認知度が急激に増したと感じている。

今回、水泳競技では2人の卒業生が参加した。一人は小野智華子で北海道から水泳を意識して上京してきた。決して本校は練習環境が整っている訳ではないので進路相談の時には勧めなかったが、地元でも環境が整っていた訳ではなかったため、専攻科から入学をしてきた。ロンドンの時に100m背泳ぎで8位(その時の金メダルは秋山里奈 本校卒業生)でリオに挑戦したが今回も同じく8位という結果だった。記録は3秒近く伸びているが、世界も伸びているのと国家試験と練習のピーク時と重なり思うような結果が残せなかった。

もう一人の木村敬一は4個のメダルを獲り、国内を賑わせた。ロンドン大会で2個のメダルを獲得していたのでオリンピック選手の指導経験のある専門家にコーチをもらい、金メダルを目指したが、残念ながら、銀2個、銅2個という結果に終わった。

女子ゴールボールでは本校卒業生から、若杉遙、天摩由貴の2名が参加した。ロンドン大会では金メダルだったので注目されていたが5位という結果だった。天摩に関してはロンドンでは陸上の短距離で出場したが、その後陸上の練習環境がなくなり競技変更をしての参加だった。また陸上では高田千秋が、マラソンでは堀越信司が参加し入賞した。

先にも述べたが年々競技レベルが向上し学校のクラブ活動の延長上では参加できないレベルにまでになった。学校を卒業後も練習を続け出場を目指す選手が多い。



木村敬一選手と表彰後



木村選手レース直前

今回のリオデジャネイロパラリンピックはテレビ放映されていたので、大勢の人が見てもらえたことは非常に有り難く感じている。自分の職場でもパラリンピックスポーツがどのようなものであるか知る機会は少なく、大会に生徒引率の経験をするか練習を見学に来るしか方法が無かった。今回が特別なことをしていた訳でもなく、いつもと同じことをしていたのだが、

-----  
2020年東京オリンピック・パラリンピックが決定したおかげで注目度があがり反響が大きかったと思う。

水泳会場は 前評判ではチケットが売れていないと報道されていたが、いつもと同じ、いやそれ以上の観客からの声援を受けた。ブラジルの人達はスポーツ観戦に(特にサッカー)慣れている。競技によってはサッカーと同じに応援されると選手にとって迷惑なこともあるが、応援されて選手は嫌な気持ちしない。地元ブラジルの選手の際は、会場が壊れてしまうのではと思うほど足踏みと大声援を送り、3位以内のメダルを獲った時は隣の会場まで声が鳴り響いていた。また、他国の選手でも世界記録が出そうな時や、最後にゴールする選手にも惜しめない拍手を送っていた。あまり日本国内の大会では見かけない事である。

2020年東京の会場でもこのような声援が送られるのだろうか心配の一つである。



選手村内で天摩・若杉選手



選手村食堂で小野選手

特に今回の大会で気になったことは、選手たちの結果だけに一喜一憂し過ぎではないかと感じた。ワールドカップのラグビーの時も同様に感じたが、お祭りかなと思ってしまった。日頃の選手の様子や練習、また予選会の様子など知っている人たちが結果に感想を述べられるのには抵抗はないが、日頃の練習も知らずにテレビだけで感想や意見を述べられたりされたのは、しっくりと来なかった。(テレビ放送の影響で有り難いと思っている)

東京に向けては、クラブ活動を通して、競技をもっと知ることや、練習の様子や国内の大会など見学や応援に行く気持ちが育たないと中身の無い自国開催になってしまうのではと危惧する。

学校の生徒達には、授業でパラリンピックスポーツの教材では世界のレベルはどのくらいなのか、そのレベルに近づく為には、日頃どんなことをすればよいか、そのためにどんな生活やトレーニングをしているのか等より具体的に身近なことから情報を提供して興味を持たせたいと思っている。本校の生徒たちはテレビをあまり見ないが、ラジオ・ネット情報などで知ることが出来るので、国内の選手だけでなく、海外で頑張っている選手たちや、また別の障害を持っている人たちの努力や工夫などを知ってもらい、競技者とは異なる視点でも自国開催を感じてほしいと思う。

最後に自分のことでもあるが、今までのパラリンピックでのべ30個以上のメダルに関わってきた。東京でもなんとか在校生をパラリンピックに出場させたいという気持ちはあるがほぼ絶望感で諦めている。OBやOGの現選手のスキルアップで出場しか望めそうになく自分が一番希望していた若手育成の道が全く見えない。競技によって異なると思うが競技を始めてから国内のトップクラスレベルに到達するのは5年近くの年月が必要で胸に日の丸をつけてアジアで国際大会を経験しアジアのトップクラスになってパラリンピックが見えてくる事を考えると7年間は競技に没頭しなければならない。ブラインドの子供たちは他障害の選手達よりスキル向上・習得に時間がかかる。このことを知らないコーチ陣も残念ながら多数いるのが実情である。

他競技では中途障害の選手たちも多いのだろう。視覚障害では先天的な障害を持つ視覚特別支援学校在籍者をいかに競技者として育てていくかが、今後のカギになるが残念ながら練習場所や専門的な指導者不足はなんら変わっていない。

練習場所・練習環境の整備と指導者不足の改善が行われなければ、ブラインドスポーツアスリートの卵たちの未来はなかなか見えてこない。2020東京までに良い方向に発展していくことを切に希望する。

## 附属聴覚特別支援学校における取り組み

附属聴覚特別支援学校 渡邊 明志

2016年は4年に一度のオリンピック・パラリンピックが南米ブラジルで開催され、本校の児童生徒にとってもオリンピック教育をより身近に捉えられる年度となった。体育や総合的な学習の時間、学校行事などを中心にオリンピックを素材とした教育活動が各学部で展開されたが、本稿では文化祭でオリンピックについて発表を行った中学部1年生の取り組みについて紹介する。

### 1. 文化祭について

本校の文化祭「櫛祭」は、毎年11月上旬に行われる。今年度は11月2日、3日（文化の日）に開催された。「芽～新たな未来に向かって～」というテーマのもと、幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科・寄宿舎などから合わせて27の展示発表があり、内外から多くの来校者を迎え好評を博した。

### 2. 展示発表「Athens1896→Tokyo2020～オリンピックの歩み～」に向けた取り組み

活動の内容は以下のとおりである。

【指導教諭】 廣瀬由美、半沢康至

【対象生徒】 中学部1年 14名

【活動目標】

- ・オリンピック・パラリンピック教育について関心を持ち、学習活動に意欲的に取り組むことができる。
- ・オリンピック競技大会はどのように行われているのか、現在の姿と歴史を学することができる。
- ・オリンピック・パラリンピックに出場する選手について調べ、まとめることができる。
- ・来場者が興味を持つ展示発表にするためにはどうしたら良いかを考え、判断することができる。

【計画】 ①期間 2016年9月22日から2016年12月5日まで

②内容 ・準備 …… 約27時間

・文化祭による展示発表 …… 2日間

・事後指導 …… 約6時間

【指導内容】

事前学習	
9月	文化祭の学年会の発表テーマについて話し合い、オリンピック、パラリンピック、デフリンピックを扱うことに決定。文化祭全体のテーマを踏まえ、未来を志向し「Athens1896→Tokyo2020～オリンピックの歩み～」と決定。
10月	(1)「歴史」「選手」「競技」「パラリンピック・デフリンピック」という4つの作業グループを決めた。 (2)グループごとに参考書籍、インターネットなどで情報を集め、展示物の文章を考えた。 (3)パンフレット原稿、校内掲示用のポスターの原稿などを代表の生徒が作成した。 (4)模造紙で掲示物を作った。その際には、下書きをしてから清書することとし、文字の大きさ、色について統一ルールを設け作業をさせた。生徒の発案で、各掲示物のタイトルはオリンピックカラー(5色)で書くことになった。 (5)来場者へのクイズを作ることに決まった。また、中学生以下の正解者に渡すプレゼントとして、折り紙で金メダルを作ることになり、掲示物の準備が終了した生徒から作業に取り組んだ。クイズ用紙の配布、質問への回答をする受け付け当番を決めた。
発表前日	
11月1日	・掲示物の展示 ・万国旗、東京オリンピックタオル等での飾りつけ ・クイズ内容との整合性を取るため、掲示物に加筆

発表当日 11月2日 3日	発表内容：掲示物の展示、クイズ、金メダルの贈呈等 (掲示物の内容) 【歴史グループ】 オリンピックの歴史、年表、日本の獲得メダル数の推移、次回冬季オリンピック平昌オリンピックの紹介、メダルの規格等 【選手グループ】 中学部内アンケートで上位になった選手についての紹介、東京オリンピックで活躍が期待される選手の紹介、メダリストの出身地地図作り等 【競技グループ】 中学部内のアンケートで上位になった種目の紹介、東京オリンピック追加種目の紹介等 【パラリンピック・デフリンピックグループ】 パラリンピック・デフリンピックの歴史、種目、デフリンピック開催地一覧表等 (生徒の活動) ・当番の時間帯にはきちんと展示室に戻り、来場者に積極的に説明をしたり、質問への回答を行ったりしていた。
事後学習 11月 12月5日	・発表当日までの反省会 ・12月のソウル聾学校との交流に向けた指導 12月5日よりソウル聾との交流の準備を始めた。文化祭の時の4グループで、文化祭の発表のまとめとクイズや質問を作成している。ソウルとの交流ということで、韓国がメダルを獲得した種目や選手、ソウルオリンピック、平昌オリンピックについて調べ学習をしながら、クイズや質問を作成していった。 ・韓国ソウル聾学校とのオンライン交流 オリンピック・パラリンピックについてのクイズを出し合った。日本からは文化祭の展示発表で調べた内容のクイズ、韓国からは2018年平昌オリンピックに関する内容のクイズが出された。また、韓国と日本の手話に関するクイズも出され、「同じ表現だ!」「日本とちょっと違うね」など、積極的な交流がみられた。

### 3. 活動結果

【来場者数】 芳名帳に記帳していただいた方の人数が1日目155名、2日目143名であった。

【来客者の反応】 感想ノートより(原文のまま)

「オリンピックについて知らないことが知れたので、良かったです。」

「オリンピックについて更に興味が沸きました。」

「あまり出ない選手の説明があったので、その選手の事が分かって良かったです。」

「4年に一度やる理由が一番気になっていたもので、スッキリしました!!!」

【表彰】 同窓会賞を受賞した。

### 4. 指導成果

【生徒の反応】(ソウル聾学校との交流後のアンケートより)

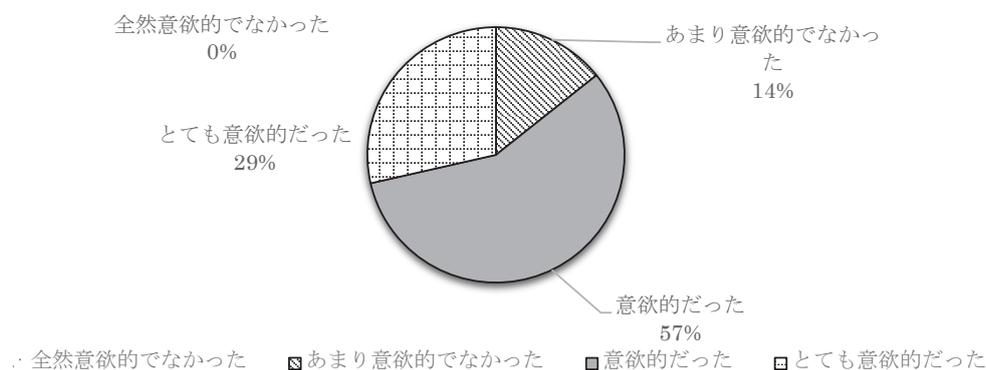
①文化祭展示や交流に向けた活動に意欲的に取り組めたか»

「とても意欲的だった」4名

「意欲的だった」8名

「あまり意欲的でなかった」2名

⇒「あまり意欲的でなかった」を選んだ生徒2名も理由として「調べるとき、余計な物を調べてしまったから」というようなことを挙げており、必ずしも意欲がなかったわけではないことがうかがわれた。



②自分たちで調べてまとめる活動や他のグループの展示物を通して初めて知ったこと

グループ名	初めて知ったこと
歴史	4年に1度の理由、いつオリンピックができたのか、古代オリンピックの種目、メダルの重さ、オリンピアという場所があったこと、東京オリンピックについてなど
競技	中学部生徒・教員へのアンケート結果の円グラフ、東京オリンピックの追加種目、平昌オリンピックの競技など
選手	人気選手について、メダリストの出身地の地図、東京オリンピックで活躍が期待される選手、平野選手が全日本卓球選手権大会で史上2人目の小学生優勝者であったこと、福原愛選手、水谷隼選手など
パラリンピック・デフリンピック	どうしてできたか、リオパラリンピックのマスコット、パラリンピックの聖火、パラリンピックのシンボルマークの変遷、デフリンピックの開催地、卒業生でデフリンピックに出場した人がいることなど

③自由記述欄

「東京オリンピックで種目が追加されることを知らなかった」  
 「オリンピックがそんなに昔からやっていたなんて知らなかった」  
 ⇒ 多くのことを初めて知った様子であった。

④今後、調べてみたいこと、知りたいこと

「プロ・アマの違い」、「お金の問題」、「ドーピングの問題」、「オリンピックでアメリカが強い理由」、「バレーボールの試合の最長時間、バスケットボールの最高得点など世界の最高記録」、「メダリストについて」、「メダルのデザインなどについて」、「パラリンピック・デフリンピックの競技」、「車椅子バスケットボール」など  
 ⇒ 指導者が思ってもいなかった具体的な内容が挙がり、生徒たちの興味・関心の高まりや理解の深まりを感じることができた。

⑤活動に取り組んでよかったと思うか

「とてもよかった」10名  
 「よかった」4名

⑥活動を肯定的に感じた理由

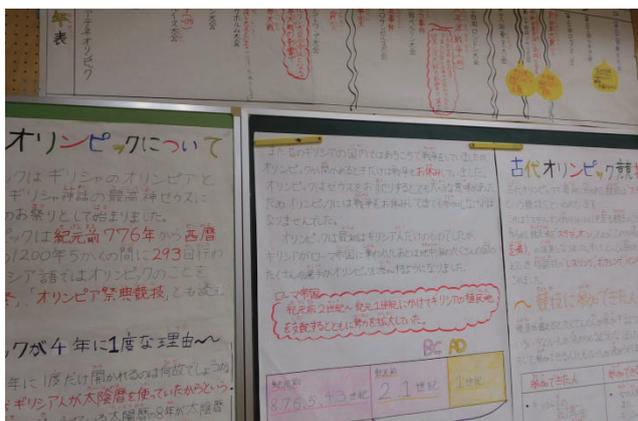
「みんなの団結力が高まってきてよかったと思うから」  
 「歴史や競技など今まで知らなかったことをたくさん学ぶことができ、知識を増やすことができ、楽しかったから」

「4年に1回の理由や東京オリンピックの期待の星とかいろいろ知れたうえで2018年の平昌オリンピック、2020年の東京オリンピックを楽しんでいきたいと思ったから」

「知らない人のために伝えるのが良かったです。僕は一生けんめいがんばったから」

「ソウル聾学校のみんなが笑ってくれたり、なるほどと言ってくれたりしたから」

【活動記録】 来客者は受付時に年齢に合わせたクイズを配布し、展示を見ながらクイズを解いていく。



活動記録① オリンピックの歴史等



活動記録② 東京オリンピックに向けて



活動記録③ パラリンピックについて



活動記録④ メダリストの出身者地図



活動記録⑤ オリンピック関係書籍



活動記録⑥ 手作り金メダルの贈呈

【指導者から】

「芽～新たな未来に向かって～」というテーマに合わせ、文化祭について話し合いを始めた時、夏休みのオリンピック熱が冷めていない状態でほぼ全会一致で決まりました。指導計画立案に際しては、中1生徒だけでこのような活動をするのは初めてだったので、進行状況に合わせて柔軟に追加していけるように検討しました。他の学年会と内容が重なるのではないかと心配もしましたが、それほど重ならなかったことと、各グループで非常に熱心に取り組んだので、内容が深まり、いい展示になったと感じました。実際、思った以上に生徒たちが集中して意欲的に活動していたので、当初の計画よりも多くの掲示物を作成することができました。しかし、受賞は予想していなかったもので、驚きましたし、喜びも大きかったです。東京オリンピックで追加される種目や東京オリンピックで活躍が期待される若い選手についてもまとめることができ、同窓会賞の受賞につながったと思われまます。

次回オリンピックは冬季の平昌オリンピックということなので、ソウル聾学校との交流もオリンピックをテーマに行うことにしました。伝える相手によって調べる内容も変わったので、より一層幅広い知識が身につけ、関心も高まりました。相手の反応を直接得ることができ、生徒は大きな達成感を得たようです (廣瀬)

夏休みにオリンピック、パラリンピックが開催されたこともあり、生徒たちの興味・関心が高く、意欲的に活動するようすが印象的でした。展示内容を話し合う活動では、自身が所属する部活動の競技はもちろん、新聞やテレビのニュースで話題になっている競技についても調べたいという意見が多く、これまで知らなかったスポーツにも触れるよい機会となりました。展示の仕方にも工夫が見えました。調べた内容をそのまま書き写すのではなく、見やすくするために色を変えたり、絵を多くしたり、会話調の説明の仕方をしたりする等、見る人の立場になって書くことができました。

今回の展示をきっかけに、スポーツへの興味・関心の高まりとともに、展示の仕方や伝え方についても学習することができたのではないかと思います。また、事後学習となるソウル聾学校との国際交流では、文化祭での内容をふり返ることができ、クイズを考える活動を通して、オリンピック・パラリンピックについての知識を深めることができました。

今回の学習では、調べた内容を発表する機会が2回あり、生徒たちは1回目の反省をいかして2回目に繋げることができ、知識の深まりと学習の定着になったのではないかと思います。 (半沢)

#### 4. その他

このほかにも、9月に行われた体育祭ではリオデジャネイロオリンピックを意識した「めざせ金メダル」(小学部1・2・3年)や「ブラジルへ行こう」(小学部4・5・6年)と題した競技種目、2月には中学部2・3年生徒28名を対象に体育授業の一環としてラート運動を実施している(昨年度に引き続き2回目、協力・講師：筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授 天野和彦氏)。

それぞれの活動を通して、オリンピック・パラリンピックに対する興味関心がより一層深まり、児童生徒の心に運動・スポーツの新たな見方や価値観が芽生えてくることを期待したい。

## みんなで盛り上げよう！！『大塚オリパラデー2016』開催♪

附属大塚特別支援学校 深津 達也

2016年6月28日、本校の体育館は、熱狂の渦に包まれていた。幼稚部、小学部、中学部、高等部の全校の子どもたちが集まり、第一回目となる『大塚オリパラデー2016』が開催された。6月23日のオリンピックデーを記念して実施したイベントで、音楽イベント、体育イベント、食育イベント、そして国際教育イベントの4つの観点からなるイベントである。①オリンピック・パラリンピックへの興味関心、②スポーツや芸術分野の学習に主体的に取り組む資質、③様々な人たちと協力して活動に取り組む資質などを高めることを目指し実施した。

音楽イベントでは、本校オリジナルのサンバ曲『♪SUNサン・サンバ』（作詞・作曲 根岸由香）や『手のひらを太陽に』（NHKみんなのうた より）を歌ったり踊ったりして楽しんだ。躍動的なサンバのリズムが流れれば、身体が自然に動き出す。体育館はあっという間にコンサート会場に早変わりし、汗をたくさん流して、カー杯踊った。小学生の女の子が、幼稚部の男の子に「一緒に歌おう」と言って、手を差し伸べた。男の子は、手を握り、一緒に腕を振りながら笑顔で歌った。いつもは甘えん坊の女の子が、少しだけお姉さんに見えた一瞬だった。

体育イベントでは、本校小学部が体育で行っている『デカパンリレー』（大きな布のパンツに2人で入り協力して走るリレー競技）を行った。初めて一緒にペアを組んだ中学生と高校生は、ゴールの手前で転んでしまった。でも、みんなが大きな声で応援をした。2人は立ち上がり、ゴールまで走り切った。チームのみんなが笑顔で迎えた。順位は残念ながら最下位だったけれど、チームがひとつにまとまった瞬間だった。

食育イベントでは、給食にブラジルのメニューが並んだ。今年度は、給食で毎月世界の料理が出され、子どもたちは給食が楽しみでたまらない。小さなブラジルの旗が掲げられた給食と一緒に記念撮影をし、地球儀でブラジルを探す子どもたち。まだ見ぬ世界に思いをはせ、世界の国々の人たちとの出会いを楽しみにしている。

国際教育イベントでは、インド発祥のヨガを体験した。身体を激しく動かすのは苦手でも、柔軟性には自信のある生徒は、僕のポーズを見て！と自信満々で嬉しそう。いくつかのポーズを取りながら、「あ～～、い～～、う～～、え～～、お～～」と長くゆっくりと息を吐き出す子どもたち。「すっきりした！気持ちよかった」「毎日ヨガを続ければ、身体がやわらなくなるかな」と笑顔で語った。世界には、まだ見ぬ様々な体験が、たくさん待っていると思うとワクワクしてくる。

『大塚オリパラデー2016』を通して、子どもたちは積極的に交流し、ともに音楽やスポーツを楽しんだ。年齢や学部という枠組みなど、子どもたちはあっという間に飛び越えてしまう。しかしながら、そのきっかけがないのが現状である。この『大塚オリパラデー』が子どもたちを結ぶ一つのきっかけになればよいと考えている。



実践報告 ▶



## 附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み

附属桐が丘特別支援学校 宮内 綾香

当校のオリンピック教育は、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行われている。今年度は、体育授業と行事に関連させた取り組みを紹介する。

### 1. 東京都障害者スポーツ大会

例年、中・高等部のすべての生徒が東京都障害者スポーツ大会の陸上競技に参加している。4月から6月初旬の大会当日まで、体育の陸上競技の単元のなかで練習を積み、その成果を発揮する場となっている。大会当日は、普段走ることのない陸上競技場で競技できるとともに、さまざまな障害そしてさまざまな競技レベルの選手と競技を通して交流を深めることができる機会となっている。また、競技結果によっては、表彰式でメダルが授与され、さらに10月に行われる全国障害者スポーツ大会の東京都代表に選出される可能性もある。多くの生徒がこの東京都障害者スポーツ大会を楽しみにしており、毎年それぞれが目標を持って3年間または6年間積極的に取り組む生徒の様子がみられる。競技を終えた生徒の表情はとても晴れやかで、自信になっている生徒が多いと感じる。自己記録の更新、メダルの獲得、そして東京都の代表など、それぞれの目標に向かって練習に取り組むなかで、生徒が卓越性を追求したり、努力することの喜びを味わったりすることができるのではないかと期待している。

今年度は、岩手県で行われた全国障害者スポーツ大会希望郷いわて大会の東京都代表に、中・高等部の生徒4名が選出され、陸上競技に出場した。練習会および遠征期間を通して他校や社会人の選手と交流を深め、心身ともに成長していく姿がみられた。



### 2. 桐が丘祭（文化祭）

本校の桐が丘祭（文化祭）は、小学部の学習発表会と中・高等部による文化祭で構成されている。今回は、中学部の取り組みに焦点を当てて紹介する。

本校中学部では、例年、各学年に分かれて企画を考えている。今年度の中学部1年生は、「障害者スポーツを多くの方々に知ってもらいたい」との願いから、クイズ形式の劇で紹介する企画を立てた。授業で経験している競技だけでなく、これまでよく知らなかった競技や興味のある競技などを取り上げることで、生徒自身が障害者スポーツに対する理解を深めることも目的とした。

まず、さまざまな障害者スポーツについて調べ、調べた中から「ボッチャ」「風船バレー」「ゴールボール」の3つを選んだ。この3つのグループに分かれ、さらに調べながらクイズ形式の劇を作っていった。ボッチャや風船バレーについては、体育の授業で取り組む生徒たちにとって馴染みのある競技であるが、ルールや歴史など新たな発見があり、理解が深まった。また、ゴールボールについては、リオデジャネイロオリンピックの日本選手団の活躍をテレビで見た生徒が多く、ぜひ体験してみたいという声があがった。そのため、附属視覚特別支援学校にご協力いただき、ゴールボールのボールを借用した。アイシェードで視界を塞ぎ、音を頼りに転がってくるボールを止めるという体験をし、その難しさやおもしろさを実感し、選手のすごさを口にする生徒が多かった。

桐が丘祭当日は、多くの来場者に集まっていただき、クイズに参加し劇を楽しみながら障害者スポーツに対する理解を深めていただくことができた。

この活動を通して、生徒たちは障害者スポーツに対する理解を深めるとともに、視覚障害者のスポーツを体験し、視覚障害者への理解を促す契機となった。



### 3. 全国特別支援学校ボッチャ大会（ボッチャ甲子園）

当校では、小学部から高等部まで12年間を通して、体育でボッチャを扱っている。ボッチャは赤・青それぞれ6球ずつのボールを投げて、ジャックボール（目標球）にいかに近づけることができるかを競うもので、最も重度な肢体不自由を有する人が参加できるパラリンピックの正式種目にもなっている。

今年度から全国特別支援学校ボッチャ大会（ボッチャ甲子園）が開催されることが決定し、当校から高等部の生徒4名が参加した。3人1組のチーム戦で、予選リーグ全勝で決勝トーナメントに進出、授業での学習の成果を発揮し、初代チャンピオンの座についた。全国特別支援学校ボッチャ大会が開催されることで、児童生徒の目標となり、今後の児童生徒の取り組みに変化がみられるのではないかと期待している。また、競技中の真剣なまなざしとは違い、競技後の生徒の表情は自信に満ちている。この大会に出場した選手たちが、それぞれ次の目標に向かって切磋琢磨し合い、2020年東京パラリンピックで活躍することを期待したい。



この大会に出場した選手たちが、それぞれ次の目標に向かって切磋琢磨し合い、2020年東京パラリンピックで活躍することを期待したい。



### 4. 高等部ハンドサッカー部活動

例年2月に、東京都の肢体不自由特別支援学校が集まり、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会が行われる。この大会に向けて、当校の高等部では年間を通じて活動を行っている。コートや道具の準備をしてくれている人の存在があって大会が成り立っていることを意識し、年度はじめは部員でコートをつくることから始まる。よりよい成績をおさめるために、チーム一丸となって練習に励むことが、卓越性の追求や努力することの喜びにつながっている。また、日々の活動や他校との練習試合を通して、チームで協力する態度や公平に試合にのぞむ態度など、他者への尊敬やフェアプレイについても指導を行っている。



これらの取り組みを重ねていくなかで、2020年の東京オリンピックを意識し、主体的に関わっていききたいという想いが感じられるようになってきた。なかでも、全国特別支援学校ボッチャ大会に高等部から4名の生徒が参加し、初代チャンピオンの座についたことで、パラリンピアンと交流する機会をいただき、生徒たちにとってよい刺激になった。そして、2016年ジャパンパラ陸上競技大会 T37クラスの100m、200m、400mに出場し、3冠（日本新含む）を飾った高等部2年女子生徒は、パラリンピック出場に向けて、本格的に取り組んでいる。12月に開催された共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集いにおけるスポーツ交流には、本校の小・中・高等部の児童生徒が自主的に参加し、馴染みのあるボッチャを通して、障害の有無、障害の種類に関係なく交流ができることを実感していた。また、当校には、9月下旬にアメリカ・シンシナシティで開催された第12回世界ラート競技選手権大会に日本代表チームのキャプテンとして出場し、シニア団体に銀メダルを獲得した教諭がいる。理科教諭として勤務に専念する一方で、競技者として現状に満足せず挑戦し続ける姿は、児童生徒の大きな励みになっていると感じる。

今後も、学校の教育活動全体でオリンピズムや国際平和等について、学ぶ、行う、観る、支えるというそれぞれの視点で、児童生徒の意識を高めていけるよう実践に努めていきたい。

## 附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取り組み

附属久里浜特別支援学校 河場 哲史

本校は知的障害を伴う自閉症の子どもたちを対象とした学校であり、幼稚部と小学部だけの学校である。このような学校の実態から、本校ではオリンピック教育の目的を次のように位置づけている。

- ・健康の保持増進のために、体を動かすことに関心をもつこと
- ・身近なスポーツを通して手足の巧緻性や操作性を高めること
- ・競技のルールを理解し、他者と一緒に楽しめること

具体的には、日々の運動活動や学校行事、地域の体育大会の参加などに、オリンピックを関連付けながら指導に当たることで、少しでもオリンピックを身近に感じたり、幼児児童の運動へのモチベーションを高めたりできるように配慮をしている。子供たちは、今までの学習の積み上げから、運動すること自体の楽しさを味わったり、努力を続けることの喜びを知ったりなど、意識が年々変化してきているように思われる。今年度の実践を次に紹介する。

### <神奈川県特別支援学校体育連盟主催の陸上夏季記録会への参加>

小学部児童9名が記録会に参加した。記録会本番に向けて3回の練習を、本校グラウンドで行った。初めはなかなかゴールテープまで走り続けることが難しい児童もいたが、練習を重ねるにつれてスピードを落とさずに走り続けることが徐々にできてきた。

記録会当日は、それぞれの児童が練習の成果を思う存分発揮し、納得のいく走りができた。最後まで走り終えた時の満足そうな表情が大変印象的であった。

### <神奈川県特別支援学校体育連盟主催の駅伝・ランニング大会への参加>

小学部児童5名が大会に参加した。大会本番に向けて2回の練習を行った。限られた時間ではあったが、実際に走る距離を体感したり、昨年度の写真などを参考に大会のイメージを持ったりした。

大会本番では、小6児童がという結果を修めることができた。結果に対する満足感を得ることはもちろん、来年に向けての目標を新たに設定することができた。また、今までは高学年の参加が主であったが、今年度は小学部1年生の参加も有り、裾野の広がりも実感している。

本校のオリンピック教育は、まだまだ試行錯誤の段階で、毎年見直しをしながら行っている。日々の教育活動にオリンピック教育の味付けを行うことで、より意欲的に活動できるようにしていきたいと考えている。幼児児童の実態を考慮しながら、今後も運動習慣を継続させることで、余暇の充実拡大にもつなげていきたい。





## 大学におけるオリンピック教育 筑波大学における全学対象の総合科目としての教育実践について

筑波大学体育系、CORE 事務局 荒牧 亜衣

### 概要

2015年度からの5年間は、オリンピック・シンボルの五つの色、それぞれから連想されるテーマを設定し、毎年講義を構成している。14年目を迎えた本年度は、「黒」によって授業計画を立案した。

### 各回の講義と講師

- (1) 4月18日「オリエンテーション」  
本科目のねらいや、各回の講義概要について紹介した。(嵯峨 寿 体育系)
- (2) 4月25日「ヒトラーと東京」  
オリンピックの政治利用について、1936年ベルリン大会と第二次世界大戦により中止となった1940年東京大会との関係から学んだ。(後藤 光将 明治大学)
- (3) 5月9日「テロの標的 ブラックセプテンバー」  
1972年ミュンヘン大会でおきたテロ事件の概要を解説し、オリンピックがテロの標的になる理由について探った。(成瀬 和弥 体育系)
- (4) 5月16日「ドーピングの広がり」  
ドーピングという行為や禁止される理由について学習するとともに、スポーツ界が抱える課題や検査の限界についても説明があった。(木越 清信 体育系)
- (5) 5月23日「古代オリンピックの栄華と衰亡」  
1200年続いた古代オリンピックがなぜ終焉を迎えたのか。そこには宗教的な理由が大きく影響していたことが明らかになった。(真田 久 体育系)
- (6) 5月30日「IOC スキャンダル」  
1999年に発覚したソルトレイクシティ冬季大会招致に絡む買収疑惑について、当時最前線で取材を行った立場から、その全貌に迫った。(福原 直樹 人文社会系)
- (7) 6月6日「オリンピズムの冒涇」  
2012年ロンドン大会で起きた「無気力試合」の顛末を振り返り、オリンピック・ムーブメント史の汚点と主張する根拠が示された。(嵯峨 寿 体育系)
- (8) 6月13日「開催都市の十字架」  
1976年モントリオール大会を事例に、開催都市が背負う十字架について、大会前、大会後それぞれの視点から解釈した。(荒牧 亜衣 体育系)
- (9) 6月20日「新・国立競技場問題 明治神宮外苑の議論を中心に」  
レガシー（後世に残す遺産）やランドスケープ・リテラシーの観点から、神宮外苑地域でオリンピックを行うことの賛否を問うた。(田中 伸彦 東海大学)
- (10) 6月27日「カーニバルの闇」  
まもなく開幕する2016年リオデジャネイロ大会に向けて、ファベラの実情からオリンピック開催の意味について考えた。(嵯峨 寿 体育系)
- (11) 7月4日「期末試験」  
期末試験

### 総括

暗部、闇、汚点、そして事件やスキャンダル。「黒」として映し出されたオリンピックに果たして光は差し込むのか。10回の講義は、オリンピック・ムーブメントの理想と現実をあらためて問い直す機会をもたらした。次年度は、「赤」を予定している。この色から連想される複数のイメージをヒントに、様々な視点からオリンピックについて学んでいくことになるだろう。

## 1972年札幌大会に関連して実施されたオリンピック教育

筑波大学大学院、CORE事務局 福田 佳太

### 【背景】

1972年2月3日から11日間にわたり、アジア初の冬季大会となる第11回オリンピック冬季競技大会（以下、1972年札幌大会）が開催された。札幌市では1940（昭和15）年の冬季大会の開催権を戦禍による影響で返上したことや、1968（昭和43）年の冬季大会の招致に失敗したこともあり、1972年札幌大会は30年間の悲願が叶った大会であった。

オリンピック教育とは、オリンピックを題材として「オリンピックを学ぶ」だけでなく、オリンピックの理念であるオリンピズムや世界に広がる多様な価値を学ぶものである。1970年代から国際的にオリンピック教育に関する研究が始められ、1988年カルガリー冬季競技大会以降、大会時における組織的なオリンピック教育が注目され始めたと認識されている。日本においては、1964年第18回オリンピック競技大会（以下、1964年東京大会）、1972年札幌大会、1998年第18回オリンピック冬季競技大会（以下、1998年長野大会）において、オリンピック教育が展開された。

そこで本稿では、1972年札幌大会に関連して実施されたオリンピック教育を、1972年札幌大会に向けたオリンピック教育と1972年札幌大会後のオリンピック教育に分け、それぞれの実施経緯と実施内容について特徴と課題を紹介したい。1972年札幌大会に関連して実施されたオリンピック教育のうち学校教育におけるものを対象とし、社会教育機関（成人学校、母親学園、婦人学級）とスポーツ少年団における実践は対象としないこととする。また、本稿では開催都市である札幌市、特に1972年札幌大会の主会場であった真駒内地区の小中学校を中心に検討する。

### 【オリンピック教育とは】

まず、現在のオリンピック教育については、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（Centre for Olympic Research and Education、以下CORE）の定義を参考にすると以下の通りである。

オリンピック教育とは、スポーツやオリンピック（パラリンピック等を含む）を教材として、国際的な視野に立ち世界平和の構築に貢献する人材を育成する教育的活動のことである。より具体的な実践内容は、以下の3つに大別できる。①オリンピック自体とその歴史の学習、②オリンピックに関連した世界各国・地域の文化や社会問題等に関する学習、③オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習、である。このオリンピックの精神やスポーツの価値とは、スポーツを通して共通にみられるポジティブな価値観のことであり、IOCが掲げる5つの教育的価値（「努力する喜び（Joy of effort）」「フェアプレイ（Fair play）」「他者への尊敬（Respect for others）」「卓越性の追求（Pursuit of excellence）」「身体、意志、心の調和（Balance between body, will and mind）」）に由来している。

これらの教育的価値を教える営みが、オリンピック教育の基本であると考えられている。ただし、これらだけではなく、それに各国・各地域での教育方法が加えられて完成すると考えられる。

### 【1972年札幌大会に向けたオリンピック教育】

1972年札幌大会に向けたオリンピック教育において、文部省では1966（昭和41）年8月1日に「冬季オリンピック等準備室（後のオリンピック管理官）」を設置し、広く国民の間にオリンピック精神を高揚し、冬季スポーツの振興を目的とした取組を推進した。1967（昭和42）年から5年間にわたりオリンピック精神普及資料作成協力会を開催し、毎年オリンピック冬季大会に関する事項や資料をまとめ、オリンピック精神普及資料として作成し、各都道府県教育委員会等に配布した。また、1971（昭和46）年には北海道をはじめ各都道府県8地区19会場で「札幌オリンピック巡回展示会」を開催した。札幌市では、「開催都市にふさわしい市民の歓迎意識を高めて、健康で明るい環境を作ろう」という目的から、1970（昭和45）年12月8日に「札幌オリンピック市民運動推進連絡会議」を発足した。この市民運動の運動項目の1つである「オリンピックを理解しましょう」で、札幌市教育委員会を中心に、学校教育における推進運動が行われた。札幌市教育委員会は、1970（昭和45）年5月26日、オリンピック教育推進協議会を設け、それを「オリンピック教育推進委員会」「オリンピック教育手引作成部会」「世界子ども美術部会」の3部会に分けて事業を進めた。また、「オリンピック教育推進についての実施要項」を各学校に通達し、この趣旨に基づき、学校教育でオリンピック教育を通して、児童・生徒に①オリンピックの意義の理解、②オリンピックへの意識の高



図1 雪と氷のスポーツ



図2 オリンピック学習の手引き

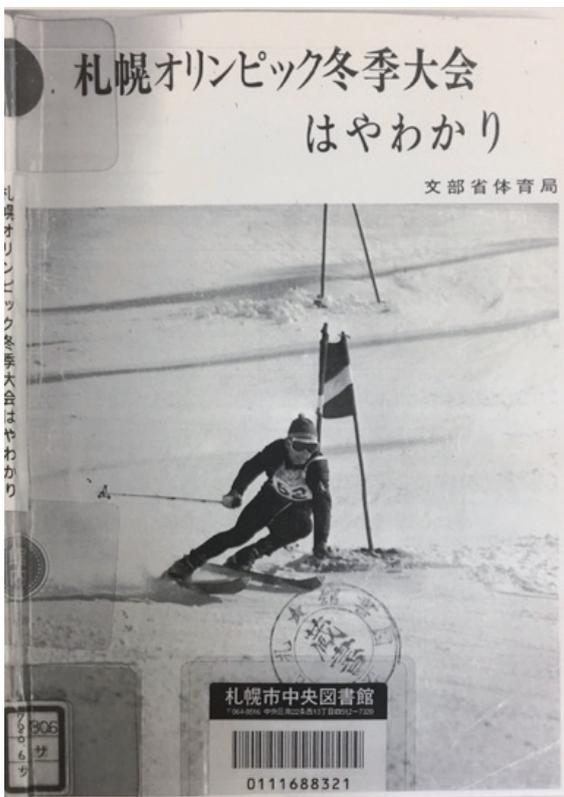


図3 札幌オリンピック冬季大会はわかり

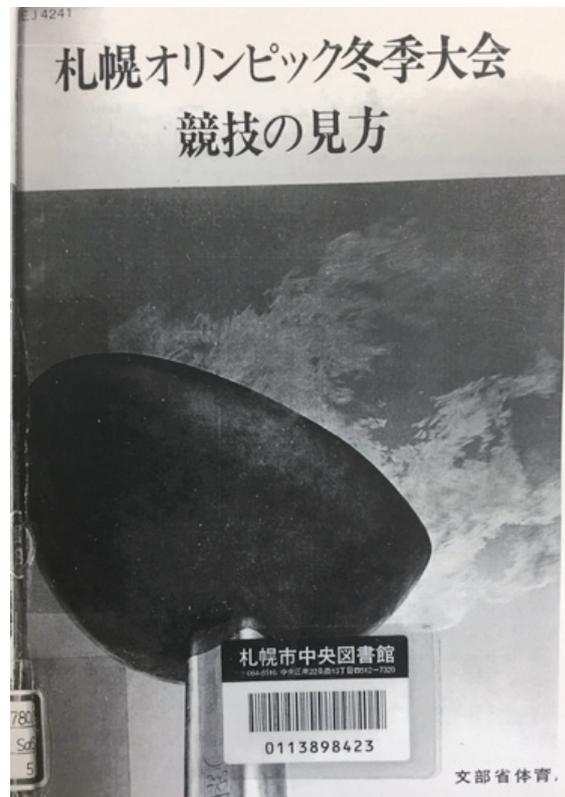


図4 札幌オリンピック冬季大会競技の見方

揚、③国際理解、④冬季スポーツ実施の奨励、⑤競技見学におけるマナーと札幌市民としての誇りと自覚の養成を目的とした。札幌市教育委員会では「オリンピック学習の手引き」「展示用学習ポスター」「オリンピック施設紹介のスライド」、札幌市では「オリンピック英会話」を作成し、文部省が作成した資料等とともに各学校に配布してオリンピック教育を推進した。1970（昭和45）年12月から2年にわたって推進され、プレオリンピック期間と1972年札幌大会期間においては、冬休みを2期に分けて、開閉会式をはじめ多くの大会関連の行事に児童・生徒を参加させた。また、「オリンピック学習の手引き」をもとに、各教科（社会科・体育・外国語）、道徳、特別活動、学校行事でオリンピック教育を展開し、姉妹校の拡大や世界子ども美術展及び書道展を開催など、児童・生徒の国際交流の機会を多く与えた。



図5 開会式での風船スケーターの児童たち

#### 【1972年札幌大会後のオリンピック教育】

1972年札幌大会後のオリンピック教育は、大会時の主会場であった真駒内地区の小中学校で独自に実施されていた。本稿では、大会運営本部局を改修して建設した札幌市立真駒内中学校（以下、真駒内曙中学校）、サービスセンターを改修して建設した札幌市立真駒内緑小学校（以下、真駒内緑小学校）に焦点を当て、1972年札幌大会後のオリンピック教育を明らかにした。

真駒内曙中学校は、大会終了後の1972（昭和47）年7月に大会運営本部局を改修して開校した。校名の候補として「五輪中」または「オリンピック中」があがったほど、地域の人々にオリンピックゆかりの学校として親しまれてきた。また、校章に1972年札幌大会のシンボルマークであった雪の紋章の使用や、学校経営の基本方針にオリンピック精神を反映させた。現在でも、校長室前のオリンピック記念コーナー、校舎西玄関の壁面に埋め込まれている札幌大会運営本部記念プレートや札幌冬季オリンピック運営本部真駒内曙中学校開校資料室など、校舎が大会当時大会運営本部局だったことを語り継いでいる。また、1973年から1992年まで雪中運動会が開催されており、実際に聖火リレーに使われたトーチを使用して雪の聖火台に点火する



図6 札幌大会運営記念プレート

## 特別寄稿 ▶

など、オリンピックの興奮と感動を再現していた。1993年以降、「オリンピックを偲ぶ日」が年間計画表に記載されるようになったが、どのような活動だったか記載されている資料が見当たらず詳細は不明である。

真駒内緑小学校は、1973（昭和48）年4月にサービスセンターを改修して開校した学校である。真駒内曙中学校同様、校章に1972年札幌大会のシンボルマークであった雪の紋章を使用したり、校歌の歌詞にもオリンピックとのつながりを感じることができる。五輪記念雪中運動会と冬のオリンピックの聖火リレーや、春の運動会の集団表現「虹と雪のバラード」などオリンピックを記念した行事も受け継がれた。また、同年オリンピック開催都市のゆかりからミュンヘン市立ディーゼル通り小学校（以下、ディーゼル通り小学校）との姉妹校提携、多くの外国人訪問者やEA活動（English Activity）など国際交流が非常に盛んな学校であり、国際交流室も設置されていた。しかし、2012年2月に閉校、同年3月に札幌市立真駒内南小学校と統合し、真駒内桜山小学校となり39年の歴史に幕を下ろした。

現在では、真駒内地区の小中学校では、意識的なオリンピック教育は実施されていないが、各学校でオリンピック教育と考えられる活動はわずかながら実施されている。



図7 雪中運動会にて聖火台への点火



図8 校章のデザイン（真駒内緑小学校）



図9 姉妹校の友だち

## 【結論】

1972年札幌大会に向けたオリンピック教育は、文部省が作成・配布したオリンピック精神普及資料を、開催地である札幌市では札幌市教育委員会が中心となり活用し、さらに英語教育や国際交流などの教育活動を加えて、組織的なオリンピック教育を展開した。これは、1964年東京大会同様に組織的なオリンピック教育を推進した先駆的事例であると考えられる。また、1964年東京大会では「オリンピック学習」と記載されていたが、1972年札幌大会では「オリンピック教育」と記載されるようになったことも特徴的である。「オリンピック教育」と記載されるようになった理由として、実施期間の長さや実施内容の充実であると推察される。1972年札幌大会に向けたオリンピック教育は、大会開会1年以上前からプレオリンピック期間を含んで推進され、札幌市教育委員会ではプレオリンピック期間と1972年札幌大会期間は冬休みを2期に分け、児童・生徒に対して両大会に豆スケーターとして開会式に参加させたり、競技の団体見学などを実施して大会に関わる機会を増やした。また、中学校における外国語の授業でのオリンピック教育の推進やオリンピック英会話の発行、姉妹校の拡大、世界子ども美術展及び書道展を開催など、児童・生徒の英語教育や国際交流の機会を多く与えた。1964年東京大会では、英語教育や国際交流の充実、長期休暇の確保などはさほど行われていなかった。つまり、札幌市教育委員会では「オリンピックを通して多様なことを学ばせる」という意味を込めて、「オリンピック教育」と記載したのではないかと解釈できる。

しかし、札幌市教育委員会主導で実施されたこのオリンピック教育も大会終了後の実施に関する記述は見当たらず、1972年札幌大会を成功させるための教育という傾向が強かったという課題も残された。

1972年札幌大会後のオリンピック教育は、大会時に主会場だった真駒内地区の小中学校で独自に実施された個別的なものであった。特に、大会運営本部局を改修して建設した真駒内曙中学校と、サービスセンターを改修して建設した真駒内緑小学校ではオリンピック教育を積極的に実施していた。両校は校章や校歌、学校経営の基本方針だけでなく、学校行事、姉妹校提携等にもオリンピック精神を受け継がせようとしていた。真駒内曙中学校での雪中運動会における聖火リレー、真駒内緑小学校での雪中運動会と冬のオリンピックにおける聖火リレー、春の運動会における集団表現「虹と雪のパレード」は、両校の生い立ちや1972年札幌大会を語り継ぐということやオリンピック精神を持って競技に取り組むこと、冬のスポーツを促進することなどについて児童・生徒は学んだと考えられる。また、真駒内緑小学校では、オリンピックを通して姉妹校提携を結んだディーゼル通り小学校との交流や国際交流児童集会の開催、EA活動（English Activity）など、児童の英語教育を充実させ国際理解を促したと理解できる。現在札幌国際プラザで働く、1991（平成3）年に真駒内緑小学校を卒業した女性は「やっぱり真駒内で育ったことが、（現在の職業に）影響してるのかもしれないね」と述べているように、小学校時代の経験が国際理解を促進するキャリアにつながっていると考えられる。

また、資料室・メモリアルルームの活用も特徴的である。真駒内曙中学校では、校長室前のオリンピック記念コーナーや札幌冬季オリンピック運営本部真駒内曙中学校開校資料室、真駒内緑小学校では国際交流室、真駒内桜山小学校に統合以降はメモリアルルームが完成し、1972年札幌大会における資料や記念品、統合前の各学校の学校誌などが展示されている。平日は児童・生徒に、参観日は保護者に、必要であれば地域の人々にも開放されており、自由にさまざまな資料や記念品等を見ることができる。資料室・メモリアルルームの活用を通して、1972年札幌大会が真駒内地区で開催されたことを現在でも学ぶことができる。実際に真駒内緑小学校の児童は「私が生まれるずっと前のことだけど、オリンピックがここで開かれたなんです」と述べ、大会終了後も1972年札幌大会が真駒内地区で開催されたことが現在でも語り継がれている。

1972年札幌大会後のオリンピック教育では、オリンピック自体とその歴史の学習に関連する教材の発行は確認されていないが、1972年札幌大会をきっかけとして設立した真駒内地区の小中学校を中心にオリンピック教育は継続され、教育制度の変遷や学校の統廃合によりかたちを変えながらも、現在に受け継がれている。

1972年札幌大会に向けた組織的および包括的なオリンピック教育と、大会後の学校独自で展開し資料室・メモリアルルームの活用で現在でもオリンピックの歴史を受け継いでいる個別的なオリンピック教育を、今後のオリンピック教育の展開の参考資料としたい。また、組織的なオリンピック教育における継続性の難しさや、教育制度の変遷や学校の統廃合など外的要因によるオリンピック教育実施の減少など、今後の検討課題としたい。

## 【主要資料及び参考文献】

- 1) 文部省体育局冬季オリンピック等準備室『オリンピック精神普及資料作成協会議事』、1968-1970.
- 2) 文部省体育局冬季オリンピック管理官『オリンピック精神普及資料作成協会議事』、1970-1971.
- 3) 文部省（1969）『雪と氷のスポーツー札幌オリンピックをめざしてー』、文部省.
- 4) 文部省（1972）『札幌オリンピック冬季大会を政府機関等の協力』、文部省.

## 特別寄稿 ▶

- 
- 5) 札幌市教育委員会（1970）『オリンピック学習の手引き』、札幌市教育委員会。
  - 6) 札幌市総務局オリンピック整理室（1972）『第11回オリンピック冬季大会札幌市報告書』。
  - 7) 札幌市立真駒内曙中学校（1982）『開校10周年記念誌あけぼの』、札幌市立真駒内曙中学校。
  - 8) 札幌市立真駒内曙中学校『曙の教育 第13-24/26-40集』、1985-1996/1998-2012。
  - 9) 札幌市立真駒内緑小学校（2012）『閉校記念誌真緑』、札幌市立真駒内緑小学校。
  - 10) 新聞：『北海道新聞』、『北海タイムス』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『団地新聞 GreenTown』、『朝日新聞』、『毎日小学生新聞』（1970（昭和40）年12月～1996（平成8）年3月発行分を検討）

## トーマス・バッハ IOC 会長 来日記念特別式典

筑波大学体育系教授、体育専門学群長、CORE 事務局長 真田 久

2016年10月20日、筑波大学東京キャンパスにトーマス・バッハ IOC 会長を迎え、名誉博士号授与式が行われた。これは政府が主催した「スポーツ・文化・ワールドフォーラム」の公式サイドイベントとして行われた TIAS スポーツカンファレンスの一つであり、筑波大学としては、2006年10月20日に前 IOC 会長ジャック・ロゲ氏に名誉博士号を授与しており、奇しくも10年後の10月20日にバッハ IOC 会長に名誉博士号を授与することとなった。会長の講演では、まず、教育とスポーツの融合を図った嘉納治五郎先生のレガシーの重要性について話された。次に2020年の東京大会が、オリンピック・アジェンダ2020の最初の試金石であること、大会開催費の縮小、新競技の追加、災害地で苦しむ人々へのメッセージ、という意味で大きな転換点となるオリンピックであることを指摘された。今後の目指すべき大会像を示したものであり、その意義は大きい。あわせて、筑波大学がオリンピック教育プラットフォーム、附属学校群やつくば国際スポーツアカデミーの活動を通して、オリンピック教育の普及に果たすのは当然であるとの指摘は、これまで継続して行ってきた私たちの活動を、激励していただいたことになろう。ここに、各登壇者のスピーチとバッハ IOC 会長の講演の要旨を留めておきたい。

永田恭介筑波大学長：トーマス・バッハ会長に筑波大学が名誉博士号（Doctor of Philosophy）を授与するのは、会長が会長就任後、オリンピック・アジェンダ2020を発表されたように、オリンピックムーブメントの改革に熱心であること、そして筑波大学で進めているオリンピックに関する教育研究の推進に対して、激励して下さったことに対して授与するものである。筑波大学は附属学校11校と連携してオリンピック教育、パラリンピック教育を展開し、全国のモデルとなっている。今後も IOC や日本オリンピック委員会、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、東京都やスポーツ庁と連携して、オリンピックムーブメントの推進に進んで行きたい。

森喜朗 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長：筑波大学は、日本人初の IOC 委員で「日本のオリンピックの父」と呼ばれ、体育を通じた教育改革に熱心に取り組んだ嘉納治五郎先生が礎を築いた大学である。その嘉納先生の意味を引き継ぎ、筑波大学はこれまで、オリンピック教育・研究の発展に努めてこられた。本日、バッハ会長が、そうした筑波大学の名誉博士号を授与されたことは、誠に感慨深く、日本のオリンピックの歩みに新たな歴史を刻むものである。組織委員会として、2020年に向けて、先人達が築いてきたオリンピック・ムーブメントを同じ船に乗った私たちが協力してさらに発展させ、日本全国、そして世界に発信していきたい。

小池百合子 都知事：アスリートが競技に集中できる環境と、日本全体の気運を盛り上げることで、アスリートの力強い技の数々を後押しする大会となるよう準備を進めたい。2020年大会を通じて、多くの意義あるレガシーを構築し、協力して持続可能な都市・TOKYOを作りたい。また、スポーツの関心を大会後も維持することを通して、スポーツが日常生活に溶け込み、誰もが活き活きと豊かに暮らせる社会の実現につなげたい。その意味でも、今後、多くの方が筑波大学の素晴らしい環境で学び、世界で活躍する国際スポーツ界のリーダーとして、より一層のオリンピック・パラリンピックムーブメントを我々と一体となって作って頂きたい。

竹田恆和 日本オリンピック委員会会長：オリンピックムーブメントにゆかりある、筑波大学から IOC バッハ会長が名誉博士の称号が授与されたことは、我々 IOC 委員にとって、また、嘉納治五郎師範が初代会長を務められた日本オリンピック委員会にとっても光栄なことである。IOC バッハ会長の更なるリーダーシップを期待し、東京大会が世界の人々の心に残る、オリンピック・ムーブメントの歴史に残る大会となるよう、我々もまた共に変革の道を確実に歩んでまいりたい。

鈴木大地 スポーツ庁長官：2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピック競技大会を目指して、関係団体の協力の元、オリンピックムーブメントのさらなる発展、具体的には教育プログラムを含めたアンチドーピング活動の展開を進めていきたい。筑波大学は今後ますます IOC との連携を深めて、世界のスポーツ人材養成機関の中核となることを期待したい。

トーマス・バッハ IOC 会長講演「オリンピックの価値 — スポーツと教育の役割 —」要旨：嘉納治五郎氏は、近代オリンピックの基礎を築き、IOC の創設者、ピエール・ド・クーベルタン男爵と同様、スポーツを教育に欠かせないものと認識して

いた教育者である。クーベルタン氏や嘉納氏の考えが、ここ筑波大学で現在も生きていることを目の当たりにし感無量である。筑波大学は、つくば国際スポーツアカデミーおよびオリンピック教育プラットフォームの活動を通じて、クーベルタン、嘉納両氏が持ち続けた理想を現代社会にも引き継いでくれている。したがって、筑波大学が2020年大会に向けて、その教育の促進に直接携わることは当然である。

筑波大学は、日本でのオリンピック教育の強化に革新的な方法を採用している。その一つは、附属学校のネットワークで、国際的平和教育を通してオリンピックの価値の理解を深める一方、それを盛り込んだ特別支援教育を提供している。これは筑波大学がオリンピックの価値の連帯感と理解を広め、日本の、そして世界の平和のために行っている重要な活動の一つである。

オリンピック教育プラットフォームは、ローザンヌオリンピック研究センターの世界的な教育コミュニティに属し、またその役割はとても重要なものである。ここでは、科学的研究と教育が一体化され、体育とスポーツのフロンティアが広がりつつある。これも筑波大学とオリンピックムーブメントの深い関係を示すもう一つの例といえよう。

2020年東京オリンピック競技大会は、日本におけるオリビズムを日本独自の方法で表現し、世界に向けて発信できる絶好の機会といえる。昨今の社会はとても不安定であり、だからこそ、スポーツの持つ統合的かつ制限のない求心力が今まで以上に必要とされている。

IOCは、オリンピック・アジェンダ2020の中で、現代社会におけるスポーツの大切さや役割を提唱している。オリンピック・アジェンダ2020では、社会との対話をスタートさせ、社会の中でスポーツがサービスとして考えられるように根本的な改革を行おうとしている。これは、オリンピック競技大会の組織にも生かされている。オリンピック・アジェンダ2020は、オリンピック競技大会のコスト削減と大会管理の柔軟性強化を目的としているが、これが以前との大きな違いである。これまでは、大会を主催するにあたり、ある都市がどのように変わるつもりかという質問をしていた。しかし、これからは、大会がその後長年に渡りどのように市民に貢献できるかを問いかけていくことになる。開催都市のニーズにオリンピックが順応していくという形である。まさに2020年東京オリンピック競技大会は、今回の改革案の第一号となる。

オリンピック・アジェンダ2020において、今回初めて、組織委員会が新競技の提案をする機会が与えられ、2020年には、新たに5種目の競技が加わる。野球・ソフトボール、空手、スケートボード、スポーツクライミングそしてサーフィンの5競技の追加は委員会の素晴らしい提案の賜物であり、心から祝福したい。5競技が追加されることは、オリンピック史上、大きな発展といえる。

さらに、2020年東京オリンピック競技大会では、被災地で競技を開催することで、レガシーの素晴らしさを増すことになる。IOCと組織委員会は出資関連者と共に、災害の影響を受けた最も苦しんでいる人々に連帯メッセージを発信し、オリンピックが、このような地域の再生にどのように貢献できるかをまとめた提案書を作成する。数週間以内に、対話が始まり、人々が必要としているこれらのプロジェクトが出資者の同意を得て開始されることを望む。2020年東京オリンピック競技大会は、日本が災害を被った地域の再生と再構築を見せることのできる絶好の場ともいえる。

これらの理由から、2020年東京オリンピック競技大会は転機点と言ってよい。かつて1964年東京オリンピック競技大会がそうであったように、2020年東京オリンピック競技大会も日本の現代史上、画期的なイベントとなろう。日本と東京は、革新的なオリンピック競技大会を主催するにあたり、大きな転機を迎える。オリンピックは、現代社会の直面している課題に取り組みながらも、豊かな文化に根付いた日本の世界への貢献を示すことを可能にする。これは、2020年東京大会組織委員会、小池都知事率いる東京都庁、安倍政権ならびにすべての出資者の共同作業である。オリンピック競技大会が東京と日本を明日の世界と結ぶ絆に関しては、確固とした展望が描かれている。オリンピック・アジェンダ2020で提唱されているように、関連機関は、持続性、実現可能性、そしてレガシーに対し、明確に焦点を当てている。

嘉納治五郎氏は、彼の生涯をかけた理想が現代の日本に力強く生き続けていること、スポーツが今日の日本を元気づけていることを誇りに思うことであろう。将来に目を向け、2020年東京オリンピック競技大会の転換期を前に、すべての人々がスポーツの価値の大切さについて考えることを期待したい。不安定な現代社会におけるスポーツの価値、オリンピックの価値の促進こそが、オリンピックムーブメントの最大の目的である。オリンピックムーブメントの生みの親、ピエール・ド・クーベルタン氏はかつて「価値のないスポーツは軍隊の行進にすぎない」と述べた。本日、私は私自身の言葉で「価値のないスポーツはただの娯楽にすぎない」と言わせていただきたい。

オリンピックの価値を促進するという目的は、私たち皆を結束させる。ネルソン・マンデラ氏は、「教育とは、世界を変えるために用いることができる、最も強力な武器である」と説いた。この言葉は、スポーツを含む社会のどんな側面にも適用できる。また、マンデラ氏の名言には「スポーツには世界を変える力がある」というものもある。教育とスポーツは人生の転機への基盤となる。

本日は、大変な名誉を、私と IOC に授与くださったことに対し、オリンピックムーブメントを代表して、スポーツの価値を促進し続けるためのご支援に心から感謝申し上げます。



#### トーマス・バッハ 氏の略歴

1. IOC 参加年：1991 年
2. 生年月日：1953 年 12 月 29 日
3. 学歴：ヴェルツブルク大学法学・政治学学士、法学修士、両博士
4. 職歴：弁護士として弁護士事務所設立・経営（1993～2013 年）ミカエル・ヴァイニツヒ AG 社（ドイツ）会長。他多数の会社役員を務める（～2013 年）。ゴルフ・アラブ・ドイツ商工会議所会長。
5. スポーツ歴：フェンシング、テニス、サッカー  
モントリオールオリンピック競技大会（1976 年）フェンシングフルーレ団体優勝、フェンシングフルーレ団体世界チャンピオン（1976 年、1977 年）欧州選手権カップ優勝（1978 年）他、数々の国内選手権で優勝
6. スポーツ関連の経歴：  
バーデンバーデンオリンピック競技大会（1981 年）におけるアスリート・スポークスマンに選出、2006 年国際サッカー連盟（FIFA）ワールドカップ組織委員会監査、2011 年 FIFA 女子ワールドカップドイツ組織委員会評議員、ドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）設立者・会長（2006～2013 年）、国際オリンピック休戦財団（IOTF）理事長
7. IOC における経歴：  
IOC 理事（1996～2000 年）その後副会長（2000～2004 年）、副会長に再選（2006 年～2013 年）、会長（2013 年～）、第 19 回冬季オリンピック競技大会（2002 年）評価委員会委員長（1994～1995 年）、第 28 回オリンピック競技大会（2004 年）評価委員会委員長（1994～1997 年）、司法委員会委員長（2002 年～）、スポーツ・司法委員会委員長（2002～2014 年）、アスリート委員会委員（1981～1988 年）、プレス委員会委員（1985～1988 年）、マーケティング委員会委員（1992 年～2014 年）、司法委員会委員（1993～2001 年）、オリンピック・コレクターズ委員会委員（1994～1997 年）、オリンピック・ムーブメント委員（1996～1999 年）、スポーツ・司法委員会委員（アスリート代表として）（1995～2001 年）、テレビ放映権・ニューメディア委員会委員（2002～2014 年）、2000 年 IOC 改革フォローアップ委員会委員（2002 年）、報酬作業部会（2004 年）、「IOC2000 年委員会における IOC の役割」作業部会コーディネーター（1999 年）、オリンピックチャンネルサービス（公開有限会社スイス法人）理事長（2015 年～）
8. 言語：英語、仏語、ドイツ語

## オリンピック・パラリンピック教育推進を目指したチャレンジ ～知的障害児にとってのオリンピック・パラリンピック教育とは～

筑波大学附属大塚特別支援学校 (文責：深津 達也)

### 1. はじめに

筑波大学附属大塚特別支援学校は、知的障害を伴う子どもたちが通う学校である。本校では、東京オリンピック・パラリンピック2020の招致が決定する前からオリンピック・パラリンピック教育に取り組み始め、先駆的な取り組みを実施してきた。リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが開催された2016年度には、本校ではオリンピック・パラリンピック教育に全校的に取り組むことを目指し、全校の子どもたちが参加する行事の開催や運営面での組織変更を含む様々なチャレンジを行った。1年間のチャレンジで見えてきたオリンピック・パラリンピック教育の可能性について述べることにする。

### 2. 重点プロジェクト「国際・オリパラ教育」始動

これまで担当者のみで行っていたオリンピック・パラリンピック教育を、全校の3分の1の教員が参加する重点プロジェクトとし、全校的に取り組むことにした。幼稚部、小学部、中学部、高等部、支援部の教員が一堂に会し、会議を行った。しかしながら、そこでまず上がった問題は、「何のためにオリンピック・パラリンピック教育を実施するのか」という多くの教員からの疑問の声であった。本校は、筑波大学の附属学校として、大学が進めるオリンピック・パラリンピック教育を積極的に実施してきた学校ではあったが、限られた時間の中で教育実践を行う学校という場にあつて、ねらいや目標がわかりにくかったり、成果を保障できなかつたりした場合には、教育実践への協力は得られない。そこでまず、「本校が目指すオリンピック・パラリンピック教育」について検討することになったのである。

### 3. オリンピック・パラリンピック教育で何を指すのか

これまで、本校が大切にしてきたオリンピック・パラリンピック教育の実践や、IOCやIPCが掲げる教育的価値、また、東京都が取り組むオリンピック・パラリンピック教育の目標等を再度全員で確認し、本校が「目指すオリンピック・パラリンピック教育」について整理検討した。その中で、オリンピック・パラリンピック教育への教員個々の価値観が異なること、また、専門とする分野（たとえば、体育、スポーツ、社会、英語、音楽、芸術等）では、大切にしたいことが異なることなどが明らかとなってきたのである。これらの違いを相互に認めた合った上で、本校のオリンピック・パラリンピック教育の目標設定に取り組んだ。

本校の教員から出た意見としては、①本校のよさを取り入れた「大塚独自」の目標を作りたい、②目標をかつちりと定めて限定してしまうのではなくある程度の方向性を示すだけにし、教員の思いや子どもの実態に合わせて調整が可能な目標がよい、③オリンピック・パラリンピック教育は全人的な教育であるため、学校が目指す教育目標と大きな関連を持つ。学校の教育目標と関連させることで、学校全体で動いていける、などであった。

本校の学校教育方針は「子ども自身の願いや思いを大切に、自立と社会・文化への参加をめざし、発達及び可能性のより豊かな発現を図る」である。この学校教育方針を中心にすえ、オリンピック・パラリンピック教育で大切にしたいことを取り入れて本校の「オリンピック・パラリンピック教育」の目標を再検討した。その結果、以下の3つを目標とすることにした。

#### ①興味関心～interest～

・興味関心を広げ、自らの願いや思いを持ち、表出する力を養う。

#### ②主体性～identity～

・主体的に活動に向かう力を育て、自らの人生をより豊かに生きる力を養う。

#### ③多様性～diversity～

・様々な文化や価値観の受容を通して、自他を大切にする心を養うとともに、他者と協力しながらより豊かな社会を実現するための平和的資質を養う。

#### 4. 本年度の取り組み

上記の目標のもと、2016年度は、全校および各部の実態に応じ、様々な優れた実践を行うことができた。その一部を紹介する。

##### (1) 世界の料理を食べてみよう

幼稚部では、2016年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック2016に関連させ、食文化をテーマに学習に取り組んだ。ブラジルのおかし「ポン・デ・ケージョ」の試食や、「ブラジルのご飯を食べてみよう」などの取り組みを通して、日本食との違いを感じたり、初めての食感に興味を持ったりする姿がみられた。

また、本年度は食育の一環として、「世界の食事」を給食メニューとして提供することで、子どもが食を通して世界に興味を持つ姿が見られた。



アイルランド



アメリカ



ギリシャ



ブラジル



日本(新潟)



スペイン



ロシア



韓国

## 特別寄稿 ▶

### (2) 世界の遊びを体験しよう

小学部低学年の学級では、児童の発達段階や学習経験などの実態と、興味関心の持ちやすさを考え、「あそび」を題材として取り上げた。世界の国々にはその国の歴史と文化が反映された「あそび」があり、中には国を超えても子どもが楽しんで取り組める要素が含まれているのではないかと考えたからである。授業では、1回目に天井からつり下げた「風船ジェンズ」を児童が一人ずつ蹴って遊んだ。障害の特性上股関節や足腰が弱く、片足立ちが苦手な児童がいるが、風船ジェンズがあることで自然に児童の動きが誘発され、体のバランスの取り方を覚えていく可能性があることも示唆された。



### (3) みんなで一緒に世界旅行

中学部では、生活単元「みんなで一緒に世界旅行！」に取り組んだ。世界には、生徒たちが興味を持ち、『知りたい』『やってみたい』と思う事柄がたくさんある。世界の様々な事柄を学習の題材とし生徒の主体的な学習参加を促すことで、生徒たちがやりたいことを自己決定したり、自分の気持ちを他者に伝えたりすることができるのではないかと考えた。

授業を進めるうちに、生徒たちは、世界の様々な音楽や食べ物に興味関心を拡げていった。



### (4) 講道館での柔道

今年度は、嘉納治五郎先生が創設した講道館にて、柔道を実施する機会を得た。中学部は、体育授業の一貫として、また、3月には筑波大学附属高校との交流として実施し、高等部は、筑波大学附属坂戸高等学校との交流として実施した。生徒たちは柔道を通して、相手の動きに合わせて自分の動きを調整することのおもしろさや、勝敗にかかわらず相手を敬う気持ちの大切さ等について学ぶことができた。中には、これから柔道を始めてみようかなという生徒もおり、様々なスポーツを経験する機会を設けることの大切さを感じた。





#### (5) 世界の人々と交流しよう

高等部では、「総合的な学習の時間」において、単元「世界の中の日本～様々な国の文化を探れ！大塚新聞編集部！」を計画した。高等部のねらいは、①様々な国の自然・文化・産業などを知り、興味・関心を持つ、②多様な民族・文化・産業などがあることを学び、日本と世界の国々の違いについて考える、③世界の国々についての学習を深め、興味・関心を世界に広げる、の3つである。日本と世界の国々のことについて「調べる学習」、「まとめる学習」、「発表する学習」を繰り返し展開し、発表時には、実際にその国の出身の方に来ていただき、生徒たちが調べた文化について発表するとともに、スポーツを通して交流を図った。生徒たちは、この単元の中で新しい知識を得ることの楽しさを知る経験によって、もっと知りたい、学びたいという気持ちが芽生えた。



#### (6) IOC 訪問

「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」の一貫として、つくば国際スポーツアカデミー (TIAS) と合同で学校訪問セッションを企画し、IOC 委員に本校が取り組んでいるオリンピック・パラリンピック教育を披露した。中学部からは、知的障害児でも全力で身体を動かしつつ相手との駆け引きを楽しめる「タグ柔道」、高等部からは、筑波大学附属坂戸高校の生徒と一緒に考案した「オニボール」を披露した。生徒たちは、自信を持って IOC 委員に紹介した。IOC 委員からは、日本のオリンピック・パラリンピック教育は上手くいっているという言葉をいただいた。





#### 6. 未来に向かうオリパラ教育を目指して

オリンピック・パラリンピック教育について先駆的に取り組んできた本校であっても、われわれ教員は多様な教育観や価値観を持っており、思いがすれ違うこともある。しかしながら、だからこそ話し合い、語り合い、よりよい教育の形を目指して進んでいくのである。オリンピック・パラリンピック教育を通して、どのような教育の姿を望むのか、子どもに何を期待するのか等、多様で多彩な価値観を共有し合い、共に考え歩んでいきたい。

## 筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（平成 28 年度）

委員長	宮本 信也	附属学校教育局教育長
副委員長	今井 二郎	教育長特命補佐
副委員長	小林美智子	教育長特命補佐
	松本 末男	附属学校教育局次長
	真田 久	体育専門学群長
	江口 勇治	教育局教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	清水 由	附属小学校教諭
	國川 聖子	附属中学校教諭
	奥村 準子	附属高等学校教諭
	横尾 智治	附属駒場中・高等学校教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	寺西 真人	附属視覚特別支援学校教諭
	渡邊 明志	附属聴覚特別支援学校教諭
	深津 達也	附属大塚特別支援学校教諭
	宮内 綾香	附属桐が丘特別支援学校教諭
	河場 哲史	附属久里浜特別支援学校教諭

## 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図

